

機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ ラフタの妹に転生をし
ちやったので奮闘をする。

ギャラクシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火星基地にいる栗色の髪をした女性、名前はレフタ・フラン克蘭ド。彼女は義妹のジュリエッタや鉄華団と共に戦っていき頑張る物語。

果たしてレフタは頑張って生き残れるのか……それとも……

目次

戦いの始まり	1
クーデター	7
ギャラルホルンを突破せよ。	14
タービンス	21
姉妹	28
ジュリエッタの新しい機体	32
奇襲作戦。	40
コンテナの中身は一体。	46
ドルトコロニーにて	51
現れた謎の仮面の男	56
蒔苗東護ノ介	65
移動をする鉄華団。	73
エドモントン攻略せよ	82
最終決戦！グレイズリッターカルタを倒して明日を求めろ！	87
ガエリオ・ボードウィン	93
レフタ達歳星へ	101
完成をしたケルデイルサーガイニングラス。	106
レフタ達火星へ	113
模擬戦	118

戦いの始まり

火星CGSと呼ばれる基地にある倉庫、銀髪の髪をした男性がその場所へとやってきた。彼の名前はオルガ・イツカ……。このCGS基地参番隊長を務めている少年だ。

「さてここにいるはずだ……」

彼は中へと入りその人物を探していると丸い球体が二個転がってきた。するとそれがパタパタと羽みたいに開いてオルガの手に収まる。

『ハロハロオルガオルガ。』

「ハロ、悪いがあの人のところ以案内をしてもらえないか？」

『ごつちごつち』

ハロが飛んで彼はついていくと栗色の髪をした女性が座っていた、プロモーションはこの基地で二人しかいないため彼らからしたら美人な人物で参番隊にも普通に接してくれて時には母のように厳しくて、時には優しくしてもらっている人物である。

彼女はオルガが近づいてきても前を向いたまま何かをしていた。

「オルガ、どうしたのかしら？こんな夜中にここに来るなんてね」

「ああ、悪いなレフタ姉さん」

レフタと呼ばれた女性は振り返り、栗色の髪をしたポニーテールが動いていた。彼女こそこの基地の女性スタッフであり彼らを鍛えている人物レフタ・フラン克蘭ドである。

「クーデリア・藍那・バーンスタインを地球へ連れていくことになってな。それで姉さんが言っていた言葉が気になってな」

「ああクーデリアちゃんが来た時に言った言葉、ギャラルホルンが攻めてくるって奴でしょ？」

「そのとおりだ。だが本当にくるのか姉さん。」

「……来るわよ。おそらく火星のギャラルホルンはクーデリアを狙っているのは間違いないわ。そしてあなたたちは戦う中、マルバたちは逃げることは話したわね？」

「ああ。ビスケットにあいつらのMWにある細工をしておいたさ。」

「それはぐっ苦勞ね。おそろく明日……いいえ今日じゃないかしら?」

「今日!?!」

「オルガ、雪之丞のおっさんにバルバトスはいつでも動かせるようにしているかしら?」

「ああ。あんたが言っていた通りにバルバトスはいつでも動かせるようにはしてある……俺は姉さんの言葉を信じるが今回の本当か?ギヤラルホルンが攻めてくるってのは」

「勘ね……オルガ、私の勘が外れたことは?」

「……ないな。」

二人が話していると何かが光ったのが見えた。レフタはオルガに急いでいくように指示を出して彼は走り全員が待っている場所へ行く。

レフタは立ちあがり振り返ると黒い機体がそこには立っていた。

「……まさかこんなにもはやく来るとはね。ジュリエツタは大丈夫かしら?一応クーデリアの護衛につかせているけど……ハロ、出撃準備」

『了解了解』

一方でオルガ達はMWに搭乗をして防衛線を敷いて追撃を行っていた。

「くそ!!こちらよりも性能はあっちの方が高いか!!」

「どうするオルガ!!」

「なーにそろそろ動くじゃないか?一番隊の皆さま達が逃げだすのを俺たちが知らないと思っているかユージン!!ビスケット作戦通りに起動させろ!!」

『了解!!』

すると彼らが戦っている方角とは別の方角から信号弾が発射された。それはビスケットが仕掛けていた一番隊のMWから発射されたものだ。

ギヤラルホルンのMWたちは一番隊の方に移動をしていく、これもレフタがオルガに言ったことである。

『おそらく一番隊は逃げだすから信号弾でもセットさせておきなさい。そうしたらどうなるか？あいつらが逃げだした方にクーデリアも一緒になっているはずと相手はそう思うからよ。』

(その通りなつたぜレフタ姉さん……)

そのおかげで戦力などが分割されてオルガ達は反撃を指示を出そうとした時、砲撃が撃ち込まれた。

彼らは停止をしてどこから砲撃が来たかと見ていると三機の機体が降りたつ。現れたのはギャラルホルンが所持をしている機体『グレイズ』。

「おいおい嘘だろ。」

「MSなんて……勝てるわけがないじゃねーか……」
全員が絶望的な状況になっていた。MWとMSの差は圧倒的にMSの方が上である。三機のうち一機が動いて右手に持っているライフルをMW部隊に向けていた。

「全員散開しろ!!絶対にとまるんじゃねーぞ!!」

オルガの指示でMW部隊は移動をしてグレイズからライフルの弾が放たれる。彼らの止まらない動きはグレイズの放つ弾丸をかわしていく。

彼らにとって当たればそこで一卷の終わりを告げていると同じだ。

「あれは!!」

少年兵ダンジ・エイレイは次々にやられる仲間を見過ごすことができずに突撃をする。

「やめろ!!そこには俺達の仲間が!!」

『よせダンジ下がれ!!』

グレイズは接近をしてしてきたダンジのMWをもっているライフルで破壊しようと砲塔を向けていた。

『ダンジ!!』

ノルバ・シノが叫んだ時、一つの弾丸が飛んできてグレイズのライフルに当たり爆発をした。ダンジはすぐに後退をして命からがら助かった。

「な、なんだ!？」

「狙撃だ!!」

オルガ達はいつたどこから攻撃が来たんだと思い見ているとグレイズに接近をして蹴りを入れる黒い機体が現れた。右手に持っているライフルで放ったであろう攻撃で武器を壊され蹴り倒されたグレイズに左手に持っていたピストルでコクピットを撃ちグレイズは動かなくなった。

二機のグレイズは突然として現れた黒い機体に驚いていた。

『そんな・・・オーリス隊長がやられた。』

「・・・オーリス・・・アイン、お前は援護をしろ!!」

『りよ、了解です!!』

クランク・ゼントは部下であるアイン・ダルトンに援護をするように指示を出して自身はアックスで黒い機体に振り下ろす。黒い機体は後ろに下がり腰部のピストルを抜いてグレイズに放つ。

「く!!」

『クランク二尉!!ってなんだ!?!』

アインは援護をしようとした時メイスが飛んできて自身の機体の右手が吹き飛ばされた。

「アイン!!」

クランクは一体何が起こったとみると基地の方から上空に飛びアインが搭乗をするグレイズを蹴り飛ばした白い機体が降りた。機体名はガンダムバルバトス・・・搭乗をしているのは三日月・オーガスである。

彼は投げ飛ばしたメイスを拾ってアインが搭乗をするグレイズに構えている。

『おのれ・・・』

アインは左手に持っているアックスで攻撃をする。三日月はバルバトスのメイスで彼が振り下ろしたアックスを受け止めてから蹴りを入れてスラスターを起動させてある場所に向かう。

『どこに・・・あれは撤退中の我が軍のMW部隊!!』

バルバトスはそちらに行きMW部隊を蹴散らした。クランクは二機もこの基地にはMSがあるとは聞いていない。だからこそ今相手

「いいいい!!」

「シノったらほらおいでなでなでしてあげるわよ」

「まじで!?!」

シノはおそろるおそろる頭を出すレフタは彼の頭をなでなでする。

「頑張ったわね皆、あなたが奮闘してくれたからこの基地を守ることができたわ。誇りに思ってもいいわ!!」

「うおおおおおおおおおおお!!」

その様子を遠くで見ていたオルガ、ビスケット、ユージンの三人。

「レフタ姉さんは人気者だなオルガ。」

「ああ彼女がいたから俺達はこちらまで生きれたんだなって思うさ……決めた。ユージン、ビスケット……このままじゃ俺達は殺されてしまうのは事実。ならここを乗っ取っちゃおうぜ。」

「な!!オルガ本気かよ。」

「ああ本気だ。一軍の奴らはおそらく腹いせで俺達を殴ってくるのは間違いない。このまま黙っていてやられるだけの俺達じゃない。だからこそクーデターを起こす。それにマルバの野郎は逃げだして此処にはいない。なら一軍の奴らさえどうにかしたらな。」

「なるほどね、レフタ姉さんにはこれは伝えるか?」

ビスケットの問いにオルガは首を横に振る。

「いや姉さんには言わずに俺たちだけでやる。ビスケット、一軍のご飯の中に痺れ薬を入れておいてほしい。」

「わかったやるなら今晚だね?」

「そうだ、昭弘とミカにも協力をしてもらうさ。今晚やるぞ!!」

クーデター

ギヤラルホルン火星基地。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

克蘭ク・ゼントは両手を組んで考えていた。その理由は上官であるコーラルに報告をしたが、コーラルは何としてでもクーデリアを捕らえろと命じてきたからだ。

(相手は子どもなんだぞ!!それをコーラルは・・・・・・・・もうギヤラルホルンに正義はないのか・・・・・・・・ならば!!)

「克蘭ク二尉!」

「私のグレイズを発進準備させろ!!ライフル以外にも赤い布及びバズーカ及びバトルブレードを搭載しろいいな!!」

「りよ、了解!!」

整備兵たちは克蘭クのグレイズの整備を急いだ。その間に克蘭クは負傷をしているアインのところへと行く。

「アイン、どうだ様子は?」

「克蘭ク二尉!?その格好は!!」

アインは克蘭クの姿がスーツを着ていたので驚いていた。あの戦いからまだそれほど経っていないのに彼は立っていた。

「これから一人で出撃をする。コーラルの奴め・・・・・・・・なぜか焦っていたが何が目的だ。私は出撃をする。」

「なら自分も!!」

「駄目だアイン、お前の機体やお前自身ダメージを受けている。お前はその傷を治せいいな?」

「く、克蘭ク二尉・・・・・・・・」

克蘭クはごくごくそとポケットからペンダントを出した。

「これをお前が持つていてくれ、いいかアイン。何があっても恨んだりするんじゃない。俺達は戦争をしていると言う事を忘れないな!!」

「く、克蘭ク二尉・・・・・・・・」

克蘭クは決意を固めて愛機であるグレイズのところへと歩いて

いく。相手が子供だろうとも……全力で戦うだけだと。

場所が変わりCGS基地の倉庫。

「すー……すー……すー……」

ジュリエッタは用意されたベットの上で眠っていた。彼女はあの後色々雪之丞たちの手伝いをしていたので疲れていたのだ。レフタはそんなジュリエッタの金髪の髪を触って自身が愛用をする銃を持ちオルガたちがいる場所に歩いていき確認をした。

「ここにあいつらを収監させたの？」

「あああいつらのご飯に睡眠薬を入れておいたからな、さーて行くぞお前ら。」

中へ入り一軍の人物たちがオルガたちを見ていた。オルガは一軍は全員いるのを確認してから挨拶をする。

「おはようございます。薬入りの飯の味はいかがでしたか？」

「ガキどもこれは何の真似だ!!」

「まあはつきりさせたいんですよ。誰がここが一番かって事を」

「ガキども！貴様ら一体誰を相手にしていると……」

「ろくな指揮も執れない人たちが何を言っているのかしら？あんたたちが会社のお金を横領をして彼らに渡さないようにしたり、そのお金を使って飲みに行ったりしているのもすでに把握をしているわよ!!」
「れ、レフタ・フランクランド!!てめえもガキどもを……そうかてめえがこいつらを!!」

「残念ながら答えはNO……このクーデター自体は彼らが立てたこと……だから。」

彼女は愛用の銃を自分に声をかけた相手の頭に突き付ける。相手は恐怖で顔をこわばらせた。

「ま、待ってくれ!!とりあえずこいつをと……」

パン!!最後まで言う前にレフタは発砲をして相手は倒れた。

「さて……これからCGSは俺達の物だ。」

「「ふざけるな!!」」

何人かが襲い掛かろうとしたが三日月とレフタが発砲をして襲い掛かろうとした大人たちは倒れていった。

「さあ選べ!!俺達宇宙ネズミの下で働き続けるのかそれともここから出ていくのか、そしてどっちも嫌ならこいつらみたいにここで終わらせるか……今のあんたたちにはこの三択しかないんだよ!!」

眼鏡の男性は出ていこうとしたがビスケットがすぐに止めた。

「あー確か会計を担当をしているデクスターさんですよ?あなたにはちよつと残ってもらいます。」

「うそーーん!!」

こうしてオルガたちのクーデターは成功に終わり、彼らはCGSを乗っ取ることに成功をした。レフタは後は彼らに任せようとしたが……オルガのところへ行く。

「ねえオルガもしお金などに困ったりしたらこの鍵でマルバの部屋をいじってみなさい。」

「どういうことだ?」

「まあわかるわよ。」

じゃあねといいレフタは振り返りシャワーを浴びることにした。シャワールームに到着をして彼女は服などを脱いでシャワーを浴びた。

さすがに返り血などを浴びていたのでそれを落としてからジュリエッタのところへ帰る。

一方でデクスターは計算をしていた。一軍の退職金及びMWの修理などを考えても運営資金は三か月しか持たないと言った。

「おいおいまじかよ。」

「いや待ってくれ、実はレフタ姉さんからカギを預かっていた。」

「オルガ、それは何のカギだつて?」

「ああ姉さん曰くマルバの部屋をいじったりしたらわかるかといっていたが……どういうことだ?」

「とりあえず姉さんの言う通りに探してみようぜ?」

ユージンの言葉に全員が納得をして部屋を漁ってみると、金庫みたいなのがたくさん現れた。

「おいおいもしかしてそのカギつて……」

オルガはカギを刺して開けると中から宝石やお金などが出てきた。

レフタはマルバとお酒を飲んだ際に彼から金庫の場所及び鍵のことも聞いていた。そして彼が眠っている間にカギなどを奪っていたのだ。

「これならかなり持つことができすね!!」

ほかの場所にも金庫があつて開けるとたくさんのお金などがありオルガ達は当分はもつなと言った。

「だがお金があつてもクーデリアを地球へ送る事だけは変わらんど。」

「お前たちすっかり忘れていないか？」

「何がだトド。」

「お前たちがドンパチをしてくれたせいでギヤラルホルンから狙われていることをな!!」

「まああれだけやっちゃまったらな。」

全員が考えていると通信が聞こえてきた。

『監視班から報告!!ギヤラルホルンのモビルスーツが一機、赤い布をもつてこちらに向かって来ています!!』

「赤い布だと?」

一方で外では雪之丞が驚いていた。

「あれは決闘の合図だ。」

「決闘?」

「ああ、まさかこの時代で決闘をする奴がいるとは思つてもいなかつたがな……」

『私はギヤラルホルン火星基地所属実働隊所属、クランク・ゼントである!!そちらの代表と一対一での決闘を申し込む!!』

全員が驚いている中レフタは現れた。彼女はパイロットスーツを着ておりその様子を見ていた。

そこにオルガ達が現れた。

「オルガ、相手は代表と一対一で戦いたいと言っているよ。」

「ほかにMS反応とかはあるのか?」

「いいえありません。MWは愚かMSはあそこの一機だけですな。」

「……ならミカに「私が行くわ。」姉さん!?!」

「私が戦った方がいいじゃないかしら?任せなさい。」

「……………そうだな、わかったよ姉さん頼みます!!」

「了解よ。」

彼女は膝をついているケルデイルサーガに搭乗をする。ケルデイルの両目が点灯をして立ちあがり腰部にロングアサルトライフルを装着をして格納庫へと行きGNロングブレイドとGNショートブレイドを装備をしてグレイズの前に降りたつた。

『貴様が代表ってことか。』

「ええその通りよ。」

『クランク・ゼント参る!!』

「レフタ・フランクランド、目標を駆逐する!!」

グレイズは左手に持っているライフルを構えてケルデイルサーガに放ってきた。彼女は肩部のフルシールドでガードをしながらスラストアーを展開させて接近をする。

『ぬ!!』

クランクは右手に持っているアックスを振り下ろすが左手に持っているGNショートブレイドで受け止める。パワーなら単純なグレイズよりも上なので彼女は押した。

『なんて力だ!!グレイズよりも上だというのか!!』

「ガンダムをそこらのMSと一緒にされては困るわ!!」

パワーで押したレフタは後ろに下がりブレイドたちを投げた。

『何?!』

突然武器を投げてくる行動にクランクは驚きながらも左手の盾でガードをしてはじかせた。次の瞬間グレイズの右足が破壊された。

『何?!』

ケルデイルサーガの右手にはロングアサルトライフルを持っており、クランクのグレイズの右足を撃ち抜いていたのだ。

彼は攻撃をしようとしたがケルデイルサーガは接近をして彼の左手などを抑えて銃口をコクピットに突き付けていた。

「さあどうする?」

『……………』

クランクはバズーカなども使おうとしたがガンダムフレームにバ

ズーカは効かないと判断をした。さらに左手も抑えられており動かすことが不可能であった。

『降伏をする。』

「……………」

レフタは降伏を選択をしてくれたのでホッとしていた。克蘭クのグレイズを右足以外が無事だったのですぐに使えるわねと喜ぶ以外にも克蘭ク・ゼントという男性を手に入れたので良かったわと思っただ。

一方で基地ではレフタが勝利をしたことがわかって全員が声をあげていた。

「さすが姉さんだ!!」

「ああ俺達の姉さんだ!!」

「さすがお姉ちゃん。」

ジュリエッタは喜んでおりそれには少年兵たちも喜んでいた。彼女はグレイズと共に帰還をしてレフタが降りたつと全員が彼女のところへと走ってきた。

「「「かっこいいです!!レフタ姉さん!!」」」

「ありがとうね。後彼の処遇だけどオルガ、私に預からせてもらってもいいかしら?」

「あのパイロットをか?」

「ええ彼はまじめな人だと私は判断をしているわ。だからこの子たちの先生をしてもらおうと思ってるね。」

「先生?」

「そそ、文字などを覚えたほうがいいでしょ?私も教えたりするけどそれにこれからはMSの整備などもやらないといけないわ。彼ならグレイズとかのMSの整備などともしていると思うからおっさんのサポートもできると思ってるね。」

「なるほどな、確かにおっさんはMW専門だったからな……………わかったぜ姉さんにあの人のことは任せる。そして!!俺達の新たな名前も決まった!!」

「「「新たな名前?」」」

「そうだ、CGSって名前をいつまでも使うわけにはいかない。そう俺達の組織の名前は鉄華団だ!!」

「鉄の火ですか?」

「いいや散らない鉄の華だ。」

(始まったのね、鉄血のオルフェンズがね……次は宇宙に上がるための準備などをしないとね。私も奮闘をしていかないかね。)

レフタはジュリエッタ用の機体をどうしようかなと考えていた。まあ宇宙でもグレイズは捕獲できるからそれらを使おうかなと……クーデターを起こしてオルガ達はCGSを乗っ取り新たな名前鉄華団と名を変えた、彼らの物語は始まったばかりなのだから。

ギヤラルホルンを突破せよ。

オルガ達によってクーデターが起こり、CGSは新たな名前として鉄華団と名乗ってクーデリアの地球護衛の依頼はそのまま継続となり彼らは宇宙へと上がることになった。レフタも必要な書類などをチェックを済ませており後はシャトルに乗りこむだけの作業をしていた。

ジュリエッタもついていくので彼女も準備を急がせていた。

「お姉ちゃん、鉄華団はこれからどこに行くの？」

「私たちはこれから地球という星にクーデリアを送るのよ。」

「地球ってあの青い星のこと？」

「そうよ。」

そこに一人の男性が入ってきた。

「フランクランド姉妹、オルガがそろそろ行く準備を済ませてくれと伝言を伝えに来たぞ。」

「ありがとうねフランクさん。」

「まあモバイルスーツの都合で貨物のシャトルを使うことになったのはあれだが……ケルデイムの装備は貨物に積み込んだあれだけか？」

「ええ後は武器コンテナに詰めてイザリビって船に乗っているから今装備をしているケルデイムサーガはあれだけになるわ。」

「武器が多いな？」

「メイン武装はロングアサルトライフル、脚部にサブマシンガンが二門、腰部にピストルが二門。背部にはハンドアックスにもなるピストルが二門、腰部にロングブレイドとショートブレイドが装備されているわね。」

「なるほどな、俺のグレイズやオーリスが乗っていたグレイズはどうなっている？」

「あれらはこちらで使用することになるわね。二機とも稼働状況はいいしね。」

「そうだな……なあフランクランド頼みがある。」

「できる限りのことは受けるわよ。」

「おそらくだが敵はコーラルが指揮をする部隊だ。あいつはクーデリアを狙っているのは事実だ。」

「なるほどね、何か裏取引でもしたのかしらね？それで……私は何をすればいいの？」

「おそらく緑色のグレイズが出てくるはず。それには俺の部下が乗っけていてな。彼らと同じように火星の血が半分流れている。」

「それで可能な限り助けてほしいって事かしら？」

「すまない。三日月にはそれを言うのは難しいと思つてな。」

「確かに。わかったわ……可能な限りやってみるわ。」

「感謝をする。」

レフタは克蘭クの頼みを聞いて全員でシャトルに乗りこんで宇宙へとび立つ。レフタは三日月と共に格納庫にいた。

「あれ？レフタ姉さんどうしたの？」

「ちよつとね。敵が来る可能性があるからね。」

二人はコクピットに乗りこんで待機をしてする中オルガ達はシャトルの中で見ていた。

「あ、あれがオルクスの船じゃないですか？」

「おかしい……予定より少し早いな……あれは!!」

オラクスの船の影からギャラルホルンのグレイズが現れてシャトルに取りつこうとしていた。トドはユージンとシノに殴られた。

一機のグレイズがワイヤーでクーデリアを渡せといていた。

「ビスケット!!」

「わかった!!行くよ三日月、レフタ姉さん!!」

シャトルのハッチが開いて煙幕が発生をする。グレイズのパイロットは小細工をと言った瞬間滑腔砲を突き付けられてからの砲撃でグレイズの一機は宇宙に浮かんだ。ほかの二機はシャトルを撃墜をしようとしたがケルデイルサマーガがその前にロングアサルトライフルから銃弾が放たれて二機のグレイズのコクピットに命中をして撃破する。

「さて三日月、行くわよ!!」

『了解だ姉さん。』

二機はシャトルを守るために宇宙を駆ける。腰部にロングアサルトライフルをしまい脚部のサブマシンガンを取りだしてグレイズに発砲をする。

レフタがグレイズの一機を撃破した隙を突いてコーラルは斧を持ちケルデイルサーガに攻撃をしてきた。

『貰ったぞ!!』

「……………それはどうかしら？」

ケルデイルサーガの前部分が展開されてミサイルが発射される。

『何?!』

ミサイルを受けてグレイズはバランスを崩してケルデイルサーガはサブマシンガンをコクピットに突き付けて発砲をしてハチの巣にした。

三日月の方も滑腔砲を放ちグレイズに攻撃をして、ケルデイルサーガがロングブレイドとショートブレイドを使ってグレイズを行動不能にしていく。コクピットにブレードを突き刺していくレフタを三日月も姉さんすごいなと思いつつ投げられたメイスをキャッチをした。

『大丈夫か三日月!!』

『昭弘?』

ライフルでグレイズを撃つたのは回収をしたクランクの機体の右足をオーリス機の機体を移植をして起動させた機体であるグレイズ改である。

『姉さんがやってるんだ。援護を頼む。』

『おい待て!!こっちは阿頼耶識がないんだぞ!!』

三日月は滑腔砲を渡してメイスでグレイズに叩きこんでいく。一方でグレイズ数機を宇宙に浮いていた。これぐらいあればジュリエッタ用とシノの分もできるわねと喜んでいと弾が飛んできた。

「おっと。」

ケルデイルサーガは肩部のシールドでガードをしていると青色のグレイズのカスタム機が現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だがその前に緑色のグレイズが接近してきた。レフタは一体どうしようと考えているとエイハブリアクターを見ていた。

「正直に言えば今の状態でこれを使ったら使用後に動けなくなるわね・・・・・・・・でも敵を行動不能にさせるぐらいならできるわね。さーてハロたち準備はいいわね？」

『OKOK!!』

『克蘭ク二尉の敵!!』

レフタはスイッチなどを押して準備が完了をした。

「行くわよトランザム!!」

すると黒いケルデイルサーガが赤くなり青のグレイズことシユヴァルベ・グレイズのパイロット、マクギリスは驚いた。

「なに?!?!」

すると彼の機体の左手が切断されていた。彼はライフルを撃とうとしたがその右手まで破壊されていた。

「これはいつたい・・・・・・・・」

アインの方もケルデイルサーガに向けてライフルを放つが素早い動きで躲かれてアインがケルデイルサーガの接近に気付く前に蹴りを喰らわされる。

「が!!」

レフタはこれぐらいでいいかしらといい、トランザムを解除をする。と、エイハブリアクターの警告が発生をする。

「やっぱりかなりエネルギーを食うわね・・・・・・・・とりあえず回収回収と。」

アインの機体と自身が倒したグレイズ、さらにマクギリスの機体の右手と左手を回収をしてレフタはイザリビに帰投をした。

ハンガーに移動したケルデイルサーガからレフタは降りたつ。すでにバルバトスやグレイズ改は回収されていた。

一方マクギリス達の機体は浮いていた。

『マクギリス大丈夫か? ひどくやられたな・・・・・・・・』

「君の方もじゃないかガエリオ、ランスユニットとアンカークローを

盗られたみたいだな。」

『ああ不覚をとった。お前が相手をしていたガンダムはいつたい?』

「……バルバトスの方は固有周波数が出たが……もう一機の方はケルデイルサーガと呼ばれるガンダムフレームだ。だが私もあの機体が突然として赤くなり気づいたら目の前にいたとしか言えない。」

『いったいどういう力だそれは……』

「いずれにしても修理が必要だ。ガエリオすまないが引っ張ってくれないか?機体が思っていた以上にダメージを受けていた。」

『わかった。』

手痛い目に遭った二機は帰投をした。

イザリビの中ではアインが搭乗をするグレイズのコクピットをクランクが開けて起こしていた。

「おいアイン!!アイン!!」

「……うあ?クランク二尉!?ってええええええええええ!?どうしてクランク二尉がここは天国なのですか!」

「落ちて着けアイン!!ここは鉄華団の船の中だ。」

「鉄華団?」

「そうだ実は……」

クランクはアインに説明をしていた。自分は決闘に負けたがここで過ごさせてもらっていること、さらにアイン自身を倒したのは決闘で自身に勝った人物レフタ・フラン克蘭ドと言う女性であること。

「では自分は……」

「ああ俺がフラン克蘭ドに頼んで助けてもらった。」

「そ、そうだったんですか……それでクランク二尉はこれからどうするのですか?」

「……俺はこのまま鉄華団に残って先生として生きたいと思う。」

「先生として……」

「そうだ、まだ数日しかないがこうして彼らと過ごしていると俺は大人として彼らを守らないといけないと思ってな。」

「……」

「クラシク先生エイハブリアクターをお願いをしたいのですが？」

「あ、あ、すぐに行く。」

「あの!!」

「え?」

「俺にも手伝わせてください!!これでもグレイズを自分で整備をしたことがあります!!」

「アイン…….いいの?お前は…….」

「いいのです。あそこにも俺は異星人扱いされるだけです。」

「いいじゃないの?この子が決めたなら私は歓迎をするわよ?」

「フランクランド。」

「え!?!ってことはあなたが!!」

「ええそうよ。レフタ・フランクランドよろしくねアイン君。」

アインは顔を真っ赤にしていた。自分が出会った女性でレフタがきれいだったからだ。

「どうしたの?」

「いいえ何でもありません!!レフタさん!!そのありがとうございました!!」

「どういたしまして?」

レフタはさてといいながら比較的損傷の少ないグレイズを一機改修してジュリエッタ用にするように指示をする。

レフタはジュリエッタにどの武器がいいか聞くと、三日月が交戦をしたガエリオ機のランスなどがいいといい、グレイズの両手をシュヴァルベ・グレイズの両手に換装をさせていた。

さらにもう一機のグレイズもパイロットがシノと言う形で準備をしていた。レフタはドリンクを飲みながらケルデイルムサーガやバルバトスを見ていた。

「…….」

彼女は宇宙を見ながら次の戦いを前世のことを思いだしていた。

「…….そうか次はタービズとの戦いか…….ってことは来るのかな姉さん。」

場所が変わりこの船はタービズのハンマーヘッドと呼ばれる船。

今タービンスオーナーでもある名瀬・タービンはCGSの元社長のマルバを乗せて鉄華団が乗るイザリビに向かって飛んでいた。

「……………」

栗色の髪をして長い髪をツインテールにしている女性はある写真を見ていた。銀髪の女性が彼女に近づいてきた。

「ラフタ、名瀬から出撃準備をしろとだとさ。」

「え……………あ、うんわかった。」

「……………どうした？その写真をまた見ていたのか。」

「ええ、私にとって大事な大事な妹だから……………」

「探しているがまだ見つかっていないから……………ラフタ、あまり期待しない方がいいぞ？」

「……………わかつている。とりあえず名瀬の言う通り出撃をするわ。」

ラフタは自身の愛機百里に搭乗をして出撃準備をする。

タービンス

イザリビの格納庫ではクランクやアインの指示を聞いてMSの調整を行っていた。ケルデイルムサーガの調整もエイハブリアクターの調整をしたりなどの調整を行っていた。

「どうですか雪之丞さん？」

「おうクランクさんか、あんたたちのおかげでMSの整備がはかどる。」

「ああだが船でやる整備などは限界がある。特にバルバトスとかはな……」

「確かに、そういえばブリッジの方は何か騒がしかったな。」

「何でも停船信号が発信されたそうです。」

「ギヤラルホルンか？」

「また戦いが起こるのかよ。」

場所が変わりブリッジ。

『人の船を勝手に乗り回しやがって!!この泥棒ネズミどもが!!』

モニターにマルバが現れてレフタはため息をついていた。

「はあ……あのバカはしつこいわね……でもまさかエイハブヴェーブの反応がないのも不思議ね。」

「レフタ姉さん、敵がそれに関してはどうもいってことだよ。」

「ふふそうだね。」

するとマルバが消えて白い服を着た人物が現れた。

『さつきから話がさっぱり進んでいない……』

「あんたは？」

『俺か？俺は名瀬・タービン、タービンスって組織の代表を務めさせてもらっている。』

「鉄華団団長オルガ・イツカだ。」

『なーが鉄華団だ!!』

「あらさつきとこの子たちを置いて逃げだした腰抜けはどこのごいっかしらっ？」

『て、てめえレフタ・フランクランド!!』

『何?』

マルバがレフタの名前を出した瞬間何か向こうで問題でも発生をしたのかと考えていると名瀬が彼女に聞いてきた。

『一つ聴きたいことある。その栗色の女性。』

「私?」

『お前さんお姉さんがいたりしないか?』

「確かに私には姉さんがいたわ。でも今はどこにいるのかわからないわね……………」

『そうか……………』

レフタはそこから無言で話を聞いていた。オルガはテイワズの後ろ盾が欲しかったので丁度良かったという。レフタも確かにテイワズの後ろ盾があつたら心強いなと思いつつなんでか知らないが喧嘩腰になっている気がするのは気のせいだろうか?と思いつつ

「悪いなタービンさん、あなたの要求は呑めない。俺達は鉄華団として引き上げた仕事があるんだ。それを投げだすわけにはいかない。」

(やれやれ……………まあ鉄華団の絆つてものは固いからね。)
「悪いけど名瀬さん、この子たちを甘く見ない方がいいわよ?」

『ほう……………』

「たとえば相手が誰であろうと私の弟分たちに手を出すつて言うなら……………私は誰であろうと戦う。」

『……………それは実の姉と戦うことになっててもか?』

「その通りよ。」

『……………お前ら生意気の代償は高くつくぞ。』

通信が切れ、レフタは無言で格納庫の方へと向かっていく。一方でハンマーヘッドの方では。

「こうなっちまったか……………辛いがラフタに連絡をしてやってくれ。妹を見つけた……………ただし敵としてなと……………」

「わかった。ラフタに連絡……………ノーマルスーツを着ろと。それと妹が敵として出てくる可能性があるよね。」

「わかりました姐さん。」

「総員戦闘準備よ!!」

レフタは格納庫に向かっていたが内心動揺をしていた。自分が言った言葉に間違っているのかと……実の姉が敵として出てくる……自分で姉を撃てるのかと……

「ラフタねえを撃てるの？私……」

格納庫に到着をしたレフタは装備を変えるよう指示を出す。

「アイン君悪いけど、ケルデイルサーガの武器コンテナからGNソードⅢを出して欲しいの。今回はそっちの装備で出るわ。」

「わかりました!!」

武器コンテナが開いてGNソードⅢがケルデイルサーガの右手に装備される。バルバトス及びグレイズ改、新たにグレイズカスタムと流星号が新たに加わりシノの機体に阿頼耶識が搭載されていた。

「よしMS部隊出撃!!」

『よっしゃ!!流星号ノルバ・シノ出るぞ!!』

『続けてグレイズカスタム出撃どうぞ。』

『ジュリエッタ・フランクランド、グレイズカスタム行きます!!』

そこからグレイズ改、バルバトスが出撃をしてケルデイルサーガは発進カタパルトにいた。

「……行くわよハロ。」

『了解』

『ヤツタルデ!!』

『ケルデイルサーガ発進どうぞ。』

「レフタ・フランクランド、ケルデイルサーガ行きます!!」

ケルデイルサーガも出撃をしてほかの四機に合流をする。

『お姉ちゃん。』

「いいわねシノとジュリエッタは初めてのMS戦になるわ。シノと昭弘がコンビを組んで、三日月とジュリエッタが組んで攻撃をしていきなさい。私は援護をする!!」

『了解。』

『はい!!』

『よっしゃ!!流星号初出撃だ!!』

『よし!!』

一方で百里に搭乗をしていたラフタは目を見開いていた。

「嘘・・・レフタがああ船に乗っていた?！」

彼女は今からその船に攻撃をするために待機をしていた。アミダからレフタがその船に乗っていると聞いて動揺をしていた。

「私はどうしたらいいの・・・とりあえず航行不能にさせれば!!！」

一方で二機の百鍊が攻撃をしてきた。ケルデイルムサーガはGNソードⅢをライフルモードにして三銃身から弾が放たれて二機に攻撃をするが躲される。

「さすがタービンスのパイロットだけあるわね。これは厄介な敵だわ。四人とも、相手は強いパイロットみたいよ。」

レフタの言葉を聞いて四人は連携で攻撃をする中イサリビの方で爆発が発生をする。どうやら敵MSが一機攻撃をしてきた。

レフタ達は前方でMSと交戦をしていた。

『もう一機いたのか?』

「四人とも任せてもいいかしら? 私はイサリビを攻撃した敵MSの相手をするわ。」

『お姉ちゃん気を付けて。』

「ええ!!！」

レフタは振り返りスラストを展開をしてイサリビの方角へ飛んで行く。アミダは逃がさないよとライフルを放とうとしたが流星号及びグレイズカスタムがライフルを百鍊の二機に放つ。

『悪いがここから先は行かせるわけにはいかねーよ!!！』

『私たちが相手をします!!！』

『行くよ。』

百里は攻撃をしているがイサリビの堅さにイライラしていた。

「硬すぎる・・・・・・エイハブウェーブ反応!？」

彼女は振り返るとケルデイルムサーガが接近をしてGNソードⅢライフルモードにして百里に放ってきた。彼女は素早く回避をしたのでレフタは高軌道なMSだわと思いつつ左手に装備された新武装を使うことにした。

それは先の戦いで回収をしたガエリオ機のワイヤークローである。

彼女はそれを百里に放ち巻き付ける。

「ぐ!!」

『イサリビはやらせない!!』

「え?」

その声にラフタは目を見開いた。敵のガンダムフレームから懐かしい声が聞こえてきた。だがどうしてなんで彼女が乗っているのと……百里はスラスターを止めた。レフタ自身も突然止まったのでそのまま百里とぶつかってしまう。

『接触接触』

「知っているわよ!!」ってワイヤークローが絡まって外れなくなった!?!」

『レフタ!!レフタ!!』

百里の方から通信が来たのでレフタはONにした。モニターが映りそこには涙を流している女性がいた。レフタはその人物を知っている。

「……ラフタねえ?」

『レフタ……レフタなの?』

「そうだよラフタねえ。」

『どうしてあなたがMSに乗っているのよ!!』

「……それは私が鉄華団のパイロットだから。ラフタねえの敵だよ。」

『な、何を言っているの私は!!』

「鉄華団の敵は私にとっての敵、だからタービンスが敵ならラフタねえは敵になる。」

『レフタ……なんで……どうして?』

「あそこには私の大事な弟分たちがいるの。だから行かせない……といってもお互いに動けない状況なんだけどね。」

現在ケルディムサーガと百里はケルディムサーガが放ったワイヤークローでお互いの機体が絡まってしまい動けない状態だ。

『……』

すると停戦信号が発信された。

名瀬は丁度オルガと共に移動をしていたのでオルガの方も驚いていた。

「レフタ姉さんの機体だ。」

「レフタ……か。ラフタが探していた妹ってのはガンダムのパイロットだったのかよ。」

そしてレフタはコクピットを開けてハンマーヘッドに着地をしてヘルメットをとると栗色の髪の毛のポニーテールが現れて後ろを振り返る。自身と同じ栗色の髪の毛をツインテールにしている女性は涙を流して立っていた。

「れ……レフタ……」

「……本当に久しぶりだねラフタねえ。」

「レフタああああああ!!」

彼女は走りだして抱き付いた。

「レフタ……レフタ生きていて生きていてくれて本当に良かったよ……」

「ラフタねえ……」

彼女も姉を抱きしめて姉妹は本当の意味で再会をした。その様子を見ていた皆はラフタが妹に再会ができてよかったと我が事のように喜んだ。

姉妹

タービンズとの戦いが終わりオルガたちは名瀬と話をしている間、レフタはジュリエッタを連れてハンマーヘッドにやってきていた。ラフタに会わせるためだ。

「レフタ姉さん、ここに？」

「ええ、そろそろ来るはずだけど？」

二人が待っていると言っているとラフタがこちらにやってきた。手を振りながらラフタは着地をしてジュリエッタの方を見ていた。

「レフタが言っていた新しい妹ってのはあなたのことね？」

「はい、ジュリエッタ・フランクランドと言います!!」

「……………ふ……………」

「えつと？」

ラフタはジュリエッタをじーっと見ていた。そのまま彼女を見て一旦離れると笑顔で親指をあげていた。

「合格!!ジュリちゃん私のことはラフタ姉さんでもラフタねえって呼んでもいいわよ!!」

「良かったわねジュリエッタ。」

「はい!!」

三人で話しをしているとオルガ達が出てきた、彼はレフタ達の方を見ていた。

「オルガお疲れ様。」

「ああ姉さん、これから俺達はテイワズの本拠地に行くことになった。」

「そう、なら私たちは団長であるあなたに従うだけよ？ほらいサリビに戻るわよ。」

ケルデイルサーガとグレイズカスタムに二人は乗りこんでオルガ達が乗ったランチと共にイサリビの方へ帰還をした。

イサリビとハンマーヘッドは進路をテイワズの本拠地歳星へと向かって移動を開始した。

移動をしている間レフタはケルデイルサーガの調整を行っていた。

次の戦闘で使う武器のチェックをしていた。右手に装備されているのはGNバズーカ型のバズーカ砲である。

ビーム兵器ではないので普通のバズーカのようになっているため片手持ちである。なおトランザムはエイハブリアクター二基だけでは使用後にエネルギーがなくなるため現在は使用をしないようにしていた。

「ふう………」

『レフタお疲れお疲れ。』

「ありがとうハロ。よいしょつと」

彼女はコクピットから降りてほかの機体を見ていた。グレイズカスタムの両手の色をグレイズ色に染めていたり、流星号の両手にMWの砲塔が装着されるなど改良をされていた。

「本当にクランクさんやアイン君がいてくれるおかげでMSの整備が進んでいるわね。私の機体の調整もお願いをした方がいいかしら？」

レフタは呟きながら格納庫を後にした。彼女が見たのはクーデリアが丁度鉄華団の子どもたちに文字を教えていたところだった。三日月もその中におり、くすりと笑いながら食堂へ移動をするレフタであった。

やがてイサリビとハンマーヘッドはティワズの本拠地歳星に到着。オルガ、ビスケット、ユージン、三日月、クーデリアと名瀬がティワズの親分であるマクマードに会いに行っている中レフタはハンマーヘッドの方へお邪魔をしていた。ケルデイルサーガとバルバトスを改良をするため彼女は残ることになる。

ハンマーヘッドの格納庫では百鍊二機でシユミレーションが行われており現在ラフタと昭弘が戦っている。

「さすがラフタ姉さん。昭弘を圧倒をしているわね………」

レフタはシユミレーションを見ながら昭弘の機体が爆発をしてシユミレーションが終了をした。コクピットが開いてラフタが出てきた。

「全くしつこいっての!!」

「もう一度頼む!!」

「はいはい昭弘、あんたは一回休みなさい。」

「れ、レフタ姉さん。」

「レフターーーーー」

ラフタはレフタに抱き付いた。

「ラフタねえやめてよ皆が見ているんだから。」

「えーやだ。」

「即答で返さないで!!」

ラフタが即答で答えたのでレフタは困ったのであった。そのあとオルガ達の盃が決定をして名瀬と鉄華団は兄弟関係になった。

そのあとの皆で飲みに行った帰りレフタはイサリビの方へと戻ろうとしたが誰かがこちらの体を触ろうとしたので彼女は勢いよく相手の顔面に蹴りを入れた。

「ふっ！ おおおおおおお!!」

「あ……………」

レフタは倒れて泡を吹いている男性に近づいた。そしてその顔を除くと前世で見た人物だつてことがわかった。

「こいつって確かジャスレイ・ドノミコルスって奴よね……………うわー泡出して気絶をしているし……………でも私の体を触ろうとしたからいいよね？ とりあえずほつとけば大丈夫ね。」

彼女はそのまマイサリビの方へ歩いていき気にしないことにした。そのあとジャスレイは部下たちに見つけてもらったが記憶喪失となつてしまい彼の会社「JPTトラスト」は解散となったが犯人がわからないため迷宮入りとなった。

補給なども終えてハンマーヘッド及びイサリビは出港をしていく中、三日月、雪乃丞、レフタときらにもう2人残っていた。

「なんでラフタねえとジュリエッタが残っているの？」

ラフタとジュリエッタの二人も一緒に残ることになった。レフタが残っている理由はケルデイルムサーガをバルバトス同様に改修作業を行っているためだがラフタとジュリエッタが残る必要がないのだ。

「えっと私の機体はパッチワーク的なのでグレイズカスタムからシユヴァルベ・グレイズタイプに改修されるそうです。」

「私は妹たちと一緒にいたいからよ。」

「あ、そうですね・・・私は何も言わないわよ。」

こうしてケルデイルサーガ及びシユヴァルベ・グレイズ、バルバトスの改修作業が行われた。ハロたちは彼女達の周りを飛んでおりラフタは一機のハロを捕まえていた。

『ハロハロ』

「可愛いわねこれ。」

「ハロって言うんだよ姉さん。私の機体のサポートをしてくれるの。」
「へえーサポートをね。」

ハロを撫でながらラフタは改修されていく機体を見ていた。バルバトスはかつての姿に戻す為の作業をしており、ケルデイルサーガはエイハブリアクターをさらに2基装着することで戦闘時間を伸ばす作業を行っている。

一番の作業はグレイズカスタムであった。こちらは装甲などを全部取り換えてバルバトスのガンダムフレームの予備を使って取り付け作業を行っていた。

「すごいことになっているわね。」

「ええグレイズにバルバトスのガンダムフレームを流用させるらしいよ。あの整備長の人嬉しそうにしていたわね。しかも制限なしでやれるから笑っていたわよ。」

「まじで?。」

五人が見守る中でバルバトスたちの改修作業は進むのであった。

ジユリエッタの新しい機体

レフタ達はバルバトス及びケルデイルサーガたちの機体をテイワズの整備長の指示でバルバトス及びグレイズカスタムは外装などが変更されていく。

ケルデイルサーガの方はエイハブリアクターが増えており二基から四基になりエネルギーが倍になったので活動時間が長くなったおかげでトランザムシステムを使っても戦闘後に戦闘不能にならなくなった。

「……………あれってグレイズなのよね？」

「てかもう違う機体じゃない。」

レフタとラフタはジユリエッタのグレイズカスタムの外装がバルバトスのようなガンダムフレームへと変わっていたので驚いていた。グレイズカスタムは元々パッチワークな機体だったのでならばティワズの技術でグレイズカスタムの外装もバルバトスで使用していたパーツを使ってグレイズの装甲などが入れ替えられていき頭部のパーツもバルバトスのようなガンダムフェイスへと変わっておりジユリエッタは驚いている。

「わ、私のグレイズカスタムが……………」

「ふえっはっはっはっは!!これはもうグレイズカスタムでないのだ!!グレイズは新たなガンダムフレームとして生まれ変わったのだ!!その名もガンダムグレイズ!!性能的にケルデイルサーガをベースにしているのだ!!頭部ギアを降ろすことでスナイプモードにすることが可能となっているのだ!!」

本来のグレイズのエイハブリアクターは一基だけだがガンダムフレームに生まれ変わったので二基になった。

姿勢にはバルバトス第二形態のような肩パーツに腕部などはケルデイルサーガのフレームが使用されており腰部には彼女が得意な武器で注文をしていた日本刀が二振装備されておりバックパックにはガエリオ機のランサーが装備されておりサブアームを使って右手に装着させることができる。さらにはバルバトスと同等の滑腔砲など

も装備するなどの大改造がされていた。

「すごいな……あれ。」

「ああグレイズがガンダムになるなんてな……正直驚いているぞ。」

雪之丞や三日月もテイワズの技術力に驚いていた。そして改修が終わりケルディムサーガやガンダムグレイズ、百里は推進力で追いかけるがバルバトスは雪之丞が搭乗をするクタン参型を装着をしてイサリビたちを追いかけるために出撃をする。

ジュリエッタはパワーが上がったガンダムグレイズの性能に苦戦をしていた。

「落ち着いてジュリエッタ。」

『す、すみません姉さん。なにせグレイズカスタムとは全然違うのですから。』

『まあまあ慣れるまで時間がかかるわよとりあえず……』

ラフタがイサリビたちを見つかけようとしたがMS反応がしたので四機は反応があつた場所へと向かっていく。

レフタはケルディムサーガはロングアサルトライフルをスナイプモードを使おうとしたがジュリエッタのガンダムグレイズのスナイプモードを試すことにした。

「ジュリエッタ。早速ガンダムグレイズのスナイプモードを試したらどうかしら?」

『わかりました。試してみますね?』

サブアームを起動させて背部から滑腔砲を構えていた。

三機はその周りを守るために辺りを護衛をしていた。ジュリエッタはロックオンをしてグレイズ改を狙っている敵MSに滑腔砲を放ち一機のMSに命中をする。

『やるじゃん!!ジュリちゃん!!』

「ええ見事よ!!」

ケルディムサーガは脚部のサブマシンガンを取りグレイズ改に取りつこうとしているMSに発砲をして相手をグレイズ改から離れさせて、バルバトスもクタン参型を分離をしてメイスで相手のMSを殴

振り下ろしたハンマーはデブリを壊すほどの威力なので彼女はサブマシンガンで攻撃をするが装甲が堅いのかはじかれる。

「サブマシンガンじゃダメか……」

『甘いんだよ!!このグダル・カデル様とグシオンの相手をするのだからな!!』

振り下ろすグシオンのハンマーをレフタは回避をして背部のピストルIIで攻撃をするがグシオンの装甲は固く弾がはじかれてしまう。

グレイズ改に体当たりを受けてタカキが搭乗をするMWが吹き飛ばされて一機のMSにつかまってしまう。

「タカキ!!」

ケルデイルサーガは高きを助けようとしたがグシオンがせまるハンマー攻撃をケルデイルサーガは受けてしまう。

「がああああああああ!!」

『レフタ!!』

『姉さん!!』

フルシールドでなんとか防いだが勢いが強くケルデイルサーガは吹き飛ばされてしまう。

ケルデイルサーガをバルバトスがキャッチをして持っている滑腔砲を放ち敵MSに攻撃をする。

そこにアジーとシノが参戦をして敵MSは撤退をしていく。

『レフタ姉さんしっかりしてくれ。』

「……………」

『三日月!!レフタは!!』

『それがさつきから反応がないんだ。』

『レフタ!!レフタ!!』

『とりあえず船まで運んでくれない?俺も推進剤がなくなっているから姉さんを運ぶことができない。』

『わかったわ!!ジュリエッタ!!』

『はい!!』

二機はケルデイルサーガとバルバトス及びグレイズ改と共に帰投をした。タカキの方はなんとか応急処置されて無事だった。レフタ

「レフタ姉さん。」

「……………昭弘？いたたたた……………」

彼女は起き上がろうとしたが体に痛みが来たので昭弘が慌てている。

「起きないでください姉さん、姉さんは敵のMSの攻撃を受けて血を流していたんです……………」

「そういうことね。（我ながら情けないわね……………戦っている最中にタカキを助けようとして敵に油断をしてくらうなんてね……………）それで大丈夫昭弘？」

「え？」

「あなたさつきから暗い顔をしているから何かあったのかしら？」

「……………実は……………」

昭弘は先ほどの戦いでかつて生き別れた弟昌弘がいたことを話した。レフタは昭弘の話を無言で聞いていた。

「なあそういうえばレフタ姉さんはラフタさんとは姉妹なんだよな。」

「ええその通りよ。」

「その……………その時姉さんは実の姉と戦うことになった時どういう気持ちだったんだ？」

「……………動揺をしたわ。」

「え？」

「……………実はあの時ブリッジに私はいたの。名瀬さんに私は甘く見ない方がいいわと言ってやったわ。そして名瀬さんはこう言った。それが実の姉と戦うことになってもか？つと……………私はその時こう答えたわ。ええ構わないと……………」

「!!」

「……………そうだったのか……………」

「ええでも格納庫に行く際に私は姉を撃てるのか？つてどれだけ恨んだりしていても私は姉さんを撃つことをためらっていた。ワイヤークローを使って動きを止めたのも相手のMSの中に姉さんが乗っている可能性があると思ったのよ。」

「……………レフタ姉さん。」

「…………口ではそういつても実際にやれないの…………だつてラフタ姉さんは私にとって大事な大事な家族だもん。」

すると扉が開いて二人は見るとラフタが涙目で立っていた。そのまま彼女は走りだしてレフタを抱きしめる。

「レフタ…………レフタごめんなさい…………ごめんね。」

「ね、姉さん？」

「ラフタ姉さん…………」

「私は最低なお姉ちゃんだよ…………名瀬に保護されてからずっとあなたを探していた。でもどこかであなは死んでしまったと思つたときがあつた。でもそれでも私は探し続けた。でもあなたを見つけることができなかった。」

「…………」

「ごめんね寂しい思いさせて…………ごめんなさいごめんなさい…………」

「ラフタねえ…………もういいよ。こうして再会できたんだから…………」

「レフタ…………」

「…………」

昭弘は姉妹の仲を邪魔をしないように部屋を退出をしようとした時レフタが声をかける。

「昭弘、あなたが弟を説得をするというなら私は協力をするわ。」

「え？」

「そうねあたしも協力してあげる。おそらく他の奴らもあんなのため協力をすると思うわよ？」

「どうして…………」

「昭弘、たとえ血がつながってなくても家族なんだからお互いに助け合うのは当然よ。」

「姉さんたち…………すまねえ…………」

昭弘は涙を流しながら部屋を後にした。

「ねえレフタ、あんなことを言っただけでできるの？」

「正直言えば難しいわね。その弟君が勘違いをしないといいけ

ど・・・・・・・・」

「そうね・・・・・・・・とりあえずレフタはけがが治るまでは動いちやだめだからね!!」

「わかっていますよ。」

レフタはラフタに言われて病室で大人しくすることにした。一方でオルガ達は名瀬から今回襲ってきたのは海賊ブルワーズってことがわかった。そして彼らはブルワーズを叩くためにデブリを使った奇襲作戦に出る。

奇襲作戦。

イサリビとハンマーヘッドによる二重の作戦。まず三日月が乗ったバルバトスとラフタ搭乗をする百里が出撃をして相手のMSたちを翻弄をする…つまり言い換えれば囿である。その間にイサリビとハンマーヘッドがデブリの中を突っ切り相手の後方から砲撃をして相手のブルワーズの船に襲撃をかける。

さらにイサリビは敵の戦艦に張り付いてオルガ達が侵入をして相手の船を占拠をする。それが今回の作戦でもある。

「……………駄目?」

「駄目です。」

レフタは出撃許可が降りなくて退屈をしていた。自分だけここで眠るのは彼女にとっても原作を知っている彼女だからこそ昭弘に心の傷を残したくないのだ。イサリビで警報が鳴っていた。

「……………」

彼女はこっそりと病室を抜け出してパイロットスーツに着替えてケルデイルサーガに乗りこんだ。

「ん?」

クランクはケルデイルサーガの両目が点灯をしているのに気づいた。

「おいケルデイルサーガに誰が乗っている!!なんで動いているんだ!!」

「え!?!」

ケルデイルサーガは右手にロングアサルトライフルを持ち発進カタパルトに向かって歩いていく、すでにほかの機体は出撃をしているので彼女は出撃をする。

「レフタ・フランクランド、ケルデイルサーガ出る!!」

ケルデイルサーガはイサリビから飛びだして戦場に現れた、敵のMSがイサリビを狙っているのを見つけて彼女はロングアサルトライフルを構えてトリガーを引きマン・ロディに命中をするが堅い装甲にロングアサルトライフルの弾がはじかれる。

「駄目か……」

マン・ロディはハンマーチョッパーを装備をしてケルデイルサーガに振り下ろしてきた。彼女は肩部のフルシールドを使ってガードをする。

「ぐ!!」

レフタ自身はまだ体が治っていない状態のため傷に響いている。さらに二機のマン・ロディが接近をしてサブマシンガンを放つてくる。

(このままじゃまずい……)

ロングアサルトライフルを腰部にしまい、腰部のホルスターからGNピストルを抜いて発砲をする。

『効かないんだよ!!』

「ならこれはどうかしら?」

ケルデイルサーガの腰部フロントアーマーが展開されてそこからミサイルが発射されて一機のマン・ロディに命中をする。

『が!!』

『ビート!!』

アストンは叫ぶがケルデイルサーガの動きが鈍ってきたのを見てチャンスと思い腕部からアンカーユニットを飛ばしてきた。

ケルデイルサーガの左足及び右手に絡ませていく。

「ぐ!!」

二機のマン・ロディはケルデイルサーガにとどめを刺そうとした時ケルデイルサーガを捕まえていたアンカーユニットが撃ち抜かれる。ケルデイルサーガは動けるようになった右手で絡まっている左足のアンカーユニットを撃ち動けるようになった。

『なんだ!!』

『させません!!』

上からガンダムグレイズがライフルを放ち一機のマン・ロディに攻撃をする。

「ありがとうジュリエッタ。」

『お姉ちゃん!!まだ体が治っていないのにどうして出撃をしているの』

!？」

「ごめんごめん、心配だからね……………あれは!!」

レフタはスラストを展開をしてガンダムグシオンを見つける。

『お姉ちゃん!!おっと邪魔!!』

バズーカを持ちマン・ロデイに放つ。グシオンは動けないグレイズ改に攻撃をしようとしていた。

「させないよ!!ハロ!!」

『危険危険トランザムは。』

「今しかないのよ!!トランザム始動!!」

『トランザムトランザム!!』

ケルデイルサーガの色が赤くなりスピードが増していく。グシオンはグレイズ改に攻撃をしようとしたが突然蹴りを受けて吹き飛ばされる。

『なんだ!?!どあ!!』

ケルデイルサーガはGNピストルを放ちグシオンにダメージを与えていた。グシオンはハンマーを振り回しているがトランザムを起動させたケルデイルサーガの動きに重量級のグシオンでは相手にならない。

ならばとバスターランチャーを放つがケルデイルサーガはそれかわして腰部のGNロングブレードとGNショートブレードを抜いてボデイを切りつけていく。

『もう!!死んで死んでほしいのよ!!』

バルカンなどを放つがケルデイルサーガは蹴りを入れて持っていたロングブレードとショートブレードをグシオンのコクピットに突き刺した。

『ぐああああああああああああああああああ!!』

そしてそのままえぐるように動かしてグシオンの動きがとまり、ケルデイルサーガのトランザム限界時間となり赤色の機体の色が元の黒色に戻っていく。だがケルデイルサーガはグシオンを刺したまま動こうとしない。百里と百鍊が近づいていく。

『なんでケルデイルサーガが……………』

『レフタ!!』

ラフタは百里で近づいてケルデイルムサーガ近くに止めてコクピットから降りてすぐにケルデイルムサーガのコクピットを開ける。そこには傷が開いてグシオンを倒して限界を迎えて気絶をしているレフタの姿だった。

「レフタ!!」

『ラフタ!!急いでイサリビにケルデイルムサーガを戻せ!!』

「わかっているわ!!」

なおブルワーズのMSの方はグシオン以外は生きており全員が降伏をしているので彼らは鉄華団が引き取ることになりヒューマンデブリの彼らは何をしてもいいのか混乱をしていた。さらにMSの方はグシオン以外は売却をすることになりタービンスにて改修をするこ
とになった。

昭弘と昌弘と再会をしたがまあ喧嘩になったがお互いに拳を交えて言いたいことを言ったのかすつきりした顔になった。

病室では。

「.....」

「まことに申し訳ございませんでした。」

レフタは現在ラフタとジュリエッタに謝っていた。彼女が目覚めますとそこには私たち怒っていますよというオーラを出している二人がいたのだ。レフタ自身も今回は自分が悪いのですぐに土下座をした。

「レフタちゃん。どうして出撃をしたのかしら?」

「えつとその.....心配でして.....」

「だからといって傷ついている姉さんが出撃してまた病室送り.....お姉ちゃんは病室で過ごしたいの?」

「そんなことはないけどね。でもいいじゃないの.....私の傷は治せるけど兄弟で再会なんて.....死んだら終わりじゃない.....」

「レフタ.....」

二人はレフタの悲しい顔を見てこれ以上は怒れない。あの時ラフタもジュリエッタも敵MSと交戦をしていたのでレフタがいなかつ

たら今頃昌弘はグシオンのハンマーで殺されていたかもしれない。

二人が去った後、数分後に扉が開いた。中へ入ってきたのは昭弘と昌弘の兄弟だ。

「あらいらっしやい。」

「その姉さん、すまない…………あの時助けてくれたのは姉さんなんだろ？」

「気にすることはないわ。それであなたが？」

「昌弘・アルトランドです。その…………あの時俺…………」
「…………昌弘君、あなたの気持ちは私にはわかるわ。私だって姉さんとは敵同士で再会をしたのだからね？」

それからレフタは自身の過去の話をする。レフタとラフタも家族を殺されてしまいで離ればなれになり彼女はなんとかその場所から脱走をしてケルデイルムサーガを盗んで火星へやってきてCGSに保護された。

そこからオルガ達との出会いや昭弘たち、さらに街でジュリエッタを拾ったりなどの過去の話を続けていた。

「姉さんも俺たちのように…………」

「ええ最初はお姉ちゃんはいつか迎えに来てくれるって信じていた。でもいつまでたっても来なかった…………だから私はこう思った。姉さんは私のことなんてどうでもいいんだって…………だから私を見捨てたんだって…………」

「…………」

「あ、ごめんね。暗い話をして…………」

「いえ、自分もレフタ姉さんと同じ気持ちだったのだから大丈夫…………」

「昭弘。」

「はい…………」

彼女は昭弘と昌弘の手を握りしめてお互いの手を握らせた。

「もうこの手を二度と離したらダメいわね？」

「ああわかってる。俺はこの手を二度と離したりしない!!」

「兄貴…………」

二人が部屋を出ていき、レフタはふうと布団に倒れた。

「昌弘を救うことができた。さらにたくさんのヒューマンデブリの子たちを助けることもできたわ。後は……フミタンとビスケットね。」

次のドルトコロニーでフミタンはクーデリアをかばって死んでしまう、ビスケットは地球降下した後の戦いでオルガをかばって死んでしまう。

「……次のコロニーまでに傷を治すことにしよう。」

レフタはベットに寝ころび傷を治すことにした。

コンテナの中身は一体。

ブルワーズとの戦いで船一隻及びMSを手に入れた鉄華団たち、ヒューマンデブリの子どもたちはイサリビでクランク及びアインの指示に従って仕事を覚えようと奮闘をしていた。

レフタは傷が治りケルデイルサーガのコクピットの中にいた。

「レフタさん、これはどこにやればいいですか？」

「ありがとうございます、それはあつちに置いといてほしいわ。」

「わかりました。」

「そんなに畏まらなくてもいいのよ？ 気楽にいなさい。」

「気楽……」

「まあそれはほかの子たちもそうだけど必死になりすぎね……大丈夫よそんなんで追い出したりしないわ。だってあなたたちは家族だもん。」

「家族……」

「さーてケルデイルの調整終わりつとハロ行くわよ。」

『ハロハロ』

ケルデイルサーガのコクピットから降りたレフタは食堂へ行くとアトラが丁度ご飯を作っていた。

「あ、レフタさん!!」

「ハローアトラちゃん、そろそろできる感じかしら？」

「はい!!」

「それじゃあ座って待っているわね？」

レフタは椅子に座ってアトラが出してくれたご飯を食べていると三日月達が入ってきた。彼らはレフタの姿を見て喜んでいた。

「レフタ姉さん!!もう大丈夫なのかよ!!」

「あははははごめんね、レフタ姉さん復活!!をしたからもう平気よ?」

「そう……良かったよ姉さん。」

「ありがとう三日月。」

レフタは三日月の頭を撫でて彼は撫でてもらったのか頭を抑えていた。彼女はふふと笑いながらも遅くになって行動を開始をするか

など考えていた。原作を知っている彼女だからこそまず確認をする必要があるからだ。

宇宙のため時間は遅くほかのメンバーたちは眠りについていて時間帯、イサリビのブリッジに眼鏡をかけた人物が座っていた。

(次のドルトコロニーでクーデリアを抹殺をせよ……か……私にお嬢様を撃てるのだろうか？昔の私だったらできたかもしれない……今の私に撃てと言う命令を聞けるのだろうか……)

眼鏡をかけた人物フミタン・アドモスはクーデリアとの交友などで悩み始めていた。するとブリッジの扉が開いて彼女は振り返るとレフタ・フランクランドが立っていた。

「……あなただったのねフミタン、ギャラルホルンなどに私たちの情報を渡していたのは？」

「……はいその通りです。」

フミタンは全て話してくれた、自分はノブリス・ゴルドンのスパイでクーデリアの動向を報告をしたりしていたことをなどを……レフタはそれを黙って聞いていた。

「ですがあなたにばれたことは私は終わりましたね。お願いです……私を殺してください。」

レフタは無言で歩いていき彼女の頬を叩いた。ばしんという音が響いて彼女の眼鏡が浮いている。

「え……」

「馬鹿言っているじゃないの!!あんたが死んだらそれこそクーデリアはどうなるのよ。」

「で、ですが私は……お嬢様を裏切ったんですよ!!あなた方をそんな私がお嬢様の傍にいれるわけじゃないですか!!」

「馬鹿ねあんたも、ならあの子がどうしてここにいるのかわかっているの?」

「え?」

フミタンは扉の方を見るとそこに立っていたのはクーデリアだった。たまたまクーデリアはレフタを見つけてブリッジの方に行ったので自分もそこに行くとフミタンとレフタが何かを言っているのが

聞こえた。

「お、お嬢様……………」

「フミタン……………私は……………」

「後は二人でお話をしてね……………私ができることはここまでだから……………」

「レフタさん。」

「レフタさん。」

「これだけは言っておくわ、私にとって家族つてのはクーデリアちゃんとかフミタン、あんたたちも入つての家族なんだからね？それを忘れないでほしいわ。」

じゃあねといいレフタはブリッジを後にして自分の部屋に帰ろうとしたが彼女は動きを止めた。

「姉さんどうしたのですか？イサリビに乗っているとは思ってもいませんでした。」

レフタが声をかけたのは姉であるラフタだった、彼女はハンマーヘッドにいるはずなのに今はこちらのイサリビの方へいたので驚いていた。だが彼女は無言で顔を俯かせていた。普段は髪をツインテールにしているのを降ろしておりレフタはどうしたんだろうと思っっていると突然姉は抱き付いてきた。

「姉さん？」

「……………ううう……………ううう……………」

突然として姉が泣きだした、レフタは突然姉が泣きだしたので慌ててしまう。なぜ姉が泣きだしたのか自分には理解ができなかった。

「姉さんどうしたのですか……………なんで私を抱きしめながら泣いているのですか？」

「当たり前だよ……………レフタが死んじゃうじゃないかってどれだけ思ったか……………あなたが昭弘を守るために出撃をしたときの前にあなたは敵の攻撃で負傷をしていた。それなのにあなたは私たちに黙って出撃をして皆に心配されて……………私とジュリエッタがどれだけ悲しんだかわかる？私にとって名瀬も大事だけど一番はあ

あなたなんだよ？家族が突然としていなくなったら悲しいもん……だからお願いこれからはあんな無茶なことはしないで？」

「……姉さん。」

レフタは泣いている姉の頭を撫でることしかできなかった、前世があるとはいえ今はラフタは実の姉でありジュリエッタ以外だと唯一の家族である。だからこそ彼女は自分のために涙を流しているんだと思った。

「ごめんね姉さん。」

それから数分後ラフタは涙を止めたのでお互いに別れてレフタは部屋に行く前に格納庫の方に向かった。

「おうレフタじゃねーか。」

「おっさん何やってるの？もうほかのみんな寝てるでしょ？」

「まあな、だがここが一番落ち着くんだよ俺にとってはな……」

「おうフランクランド、どうした？」

「克蘭クさんもいたのですか……」

「ああ私も雪乃丞殿と先ほどまで一杯していたところだ。ところでどうしたんだ？」

「ええブルワーズとの戦いの際に船被弾をしたでしょ？それで今回運ぶことになっている荷物大丈夫かなと思ってね。」

「確かに船は被弾をしたからもしかしたら商品が大変なことになっているからな……」

三人はドルトコロニーに送るコンテナを確認をするためにオープンをする、だが彼らが見たのは銃などが見えたからだ。

「これはアサルトライフルにMWが入っているぞ……」

「おっさんこれが間違っていたりしない？」

「いいや今回運ぶ荷物のコンテナはこれで間違いないはずだ。」

「……これって急いでオルガと名瀬さんに連絡をしないよね。」

「ああ流石にこれはまずいだろう。」

「だがなんで武器などがこのコンテナに収納されていたのか？」

「いずれにしても連絡をしないとね!!」

レフタはオルガと名瀬に連絡をしてコンテナの中に入っていたのが武器やMWだつてことを連絡をする。オルガ達は驚きながらも名瀬と相談をしていた。

彼らはどうするのか話をしている中レフタはこの武器をどうするのかなど思いつつもオルガ達の決定を待つことにした。

ドルトコロニーにて

レフタ達によってコンテナの中にあっただのがデモを利用をしようとしたギャラルホルンの企みと分かった鉄華団とタービンス、オルガと名瀬はこれを利用してギャラルホルンを翻弄をしようと準備をしている中、フミタン、クーデリア、アトラそしてレフタの四人はドルト3にやってきた。

レフタは警戒をしていた、ノブリスがクーデリアを狙ってるなら危ないと思い彼女達の護衛をしている。

彼女自身は拳銃などを所持をしており念のためにフミタンたちには中に防弾チョッキを着てもらってからその上に服を着てもらっている。

(一応様子を見ながら辺りを見ているけどノブリスの奴らが見張っている感じがするわね……さすがに私一人でやれないから後はお任せをするわ？アイン君、克蘭クさんにジュリエッタ。)

一方でノブリスが送った手の者たちは気絶させられていた。

「全くフラン克蘭ドも困ったことを言うな。」

「克蘭クさんコチラも終えました。」

「ご苦労だなアイン。だがフラン克蘭ドが言っていたのはこいつらのことだったか……」

「ええ姉さまは曰く、ノブリスは必ずクーデリアさんを殺す可能性がある。だからその手の者たちが彼女を見張っているじゃないかと言っていました。」

「それが彼らなんですね？うわースナイパーライフルまで所持をしていましたよ克蘭クさん。」

「それにしても先ほどからギャラルホルンの奴らがコロニー内で動いているのは一体何があったのか：俺達はフラン克蘭ド達と合流をするぞ。」

三人は犯人たちを気絶させてからレフタ達と合流をするために向かう中オルガ達によって会社のネットワークから色々と情報を得てそれらをサヴァランという男に渡さしていた。

そう不祥事などをサヴァランが発表をするという計画が発動をしていたのだ。そしてレフタ達もコロニーの方から戻ってきたのを確認をしてイサリビは発進をさせる。

「よし船を出すぞ!!」

「オルガ!!後方からエイハブウェーブ反応だ!!戦艦が三隻だ!!」

「ちい……一隻は火星で俺たちを襲った一隻か、MS部隊を出せ!!」

「了解ですMS部隊発進してください。」

バルバトス、流星号及びガンダムグレイズが出撃をしていきケルデームサーガも出撃をしていく。

武装はロングアサルトライフルを装備をしてほかの三機を援護をするためにスナイプモードを起動させる。

『おらおらおら!!流星号のお通りだ!!』

流星号が持っている武器はGNサブマシンガンでシノがレフタに頼んで借りた武器である。放たれたサブマシンガンがグレイズの一機に命中をして腕などが破壊されてコクピットに命中。

バルバトスはメイスでグレイズ達を次々に叩き潰していきグレイズが援護をするために両手に持っている滑腔砲を放ちグレイズの頭部を破壊していく。

「さすがガンダムフレームに改良されただけありますね、二丁でも反動が少ないですね。」

『でも阿頼耶識ないんでしょ?どうしているの?』

「それは姉さんがくれたハロたちがサポートをしてくれています。」

『『ハロハロ』』

『それいいなー俺も頂戴よ。』

「それは姉さんにとっておっと。」

二機はしゃべりながらも次々に襲い掛かるグレイズを殴り、撃つて撃破する。レフタの方はイサリビの近くで護衛をしながら彼らを突破をしたグレイズを狙い撃ちをしていた。

「これで終わりかしら?」

『レフタレフタ!!』

「エイハブウエーブ……これはツインリアクターってことはガンダム・フレイムね？」

彼女は構えると騎士のような機体が素早い動きでケルデイルサーガの方へと突撃をしてきた。

彼女は回避をしてアサルトライフルを放つがキマリスの素早さに回避される。

「速い……」

『甘いぞ火星のゴミどもがああああああああああ!!』

ターンをして来てケルデイルサーガは回避をしたがキマリスの肩部が開いてリッパ―ガ射出されてコクピット部分をえぐっていく。

「く!!隠し武器!!邪魔!!」

コクピットを開いて前が見えるようになり彼女はケルデイルサーガのアサルトライフルを放つ。

キマリスに搭乗をしているガエリオはとどめを刺すために加速させてケルデイルサーガに突撃をする。

「ん？」

モニターでコクピットを見るとそこには女性が乗っているのに気づいた。

「な!!女が乗っている……だと……(なんだなんで俺は相手を見てドキドキをしている!?)っていかんいかん!!これで終わりだああああああああ!!」

「まず!!」

レフタもさすがにまずいと思っていると彼女の目の前に何がさえぎりキマリスの攻撃をふさいだ。

『姉さん無事か!!』

「その声は昭弘?その機体は!!」

『ああタービンスによって改良された俺の機体!!グシオンリベイクだ!!』

グシオンリベイクはライフルを構えてキマリスに発砲。その攻撃を受けてバランスを崩す。

『姉さん大丈夫!?!』

『おいおい姉さんコクピット部分のハッチ破壊されているのかよ?』
「まあ私自身外が見えないからオープンしているだけよ?」

レフタはグシオンを見ながらキマリスの方を見ていた。彼女はピストルⅡを構えてキマリスに攻撃をする。

『貴様!!何者だ!!』

「え?」

『名前を言えつと言っている』

「レフタ、レフタ・フランクランド。」

『そうか……レフタ……レフタ……レフタ・フランクランドだな。覚えてぞ!!』

「なんで!？」

『今は撤退させてもらうが……レフタ、いやレフタさん!!あなたはこのガエリオ・ボードウインがもらい受ける!!』

「え?」

キマリスは素晴らしいながら撤退をしていきレフタ自身はポカーンとなっていた。

「もらい受ける?」

彼女は首をかしげてしまう、ガエリオは一体何を言いたかったのか理解ができていない状態だ。

「……」

レフタたちは敵が撤退をしていくのを見てイサリビの方へと帰還をした。だが三日月達は帰ってからも不機嫌だった。

ブリッジに上がるとオルガ達の方も苦笑いをしていた。モニターの方では名瀬たちも苦笑いをしていた。

『あはははお前さんもモテるんだな?』

「はい?」

『あのパイロットお前さんのことをもらうっていったんだよな?それってお嫁さんにくれってことじゃないか?』

「はあ!？」

『お嫁さんなんて反対よ!!』

モニターにラフタが現れて猛抗議。

「当たり前だ!!レフタ姉さんは絶対に渡さん!!」

「その通り、レフタ姉さんは俺達のだから絶対に渡したりしない。」

「おうとも!!」

「俺も鉄華団の一員としてフランクランドを守る!!」

「僕もです!!」

「私も同じです!!お姉ちゃんは私を救ってくれた希望だから!!」

鉄華団たちの団結力は更に強くなり、レフタ自身は苦笑いをするしかなかったが、なんでガエリオは自分をお嫁さんにしようとしたんだろうと考えるのであった。

現れた謎の仮面の男

イサリビの格納庫、ケルデイルサーガはコクピット正面の修理をしていた。前回の戦いでガエリオが搭乗をするガンダムキマリスの攻撃でコクピットの正面がダメージを受けてしまい、その部分の修理が今クランクを中心に行われていた。

アストン達もクランクたちの指示を聞いて修理を手伝っていた。その様子をレフタはポニーテールをしている髪を降ろしてみていた。

「レフタ姉さん。」

「あー三日月どうしたの?」

彼はケルデイルサーガの方を見ていた。

「随分ボロボロにされたね?」

「やられたのはコクピット正面だけよ?それで私に用があるみたいな感じね?」

「うん、オルガがブリッジに来てほしいって。」

「わかったわ。」

彼女は三日月の後をついていきイサリビのブリッジへと到着をする。そこにはアミダと名瀬の二人がおりそのあとにクーデリアとフミタンが入ってきた。

「遅くなってすみません。」

「気にするなって。」

「それでいつ頃出発をするのですか?」

「あーそれなんだが……予定では地球軌道上の二つの共同宇宙港で降下船を借りて降下船で降りる予定だったんだが……お前たちの動きはギヤラルホルンにきつちりとマークされちゃった、もうこの手はつかうことができねえ……」

「厄介なことになったわね……降下船が使えないとなると私たちはどうやって地球へ降下をすればいいのかしらね?」

レフタの言葉に全員が考えているとフミタンが声をあげる。

「こちらに接近をしてくる謎のエイハブウェーブを確認。」

「ギヤラルホルンじゃないのかな?」

「だったら一隻で来るとは思えないわ。(まあここで現れるのはマクギリス……いいえモンターク以外ないわね。)」

レフタは心の中で呟いていると仮面を付けた白髪の人物が現れて代表とお話がしたいということを行いオルガ達はその話に乗ることになった。

一方で地球軌道統合艦隊の船に搭乗をする。イシユウ家の一人娘カルタ・イシユウはガエリオからの連絡を受けてクーデリアが地球へ向かっているという連絡を受けて準備を進めていた。

鉄華団が地球へと向かっている情報を得ているため、彼女はふふふと笑いながらこちらに向かう鉄華団を迎え撃つために、そして老人達を見返す為に……

一方でイサリビではランチに荷物などを移動をしていた。ついでに克蘭ク達が使用する新たなMSが完成をしていた。名前はグレイズカスタムとグレイズキャノンである。

以前捕獲をした機体をタービンスズにお願いをして二人用に調整を行っており二人はMSに搭乗をしてランチの手伝いをしていた。

『どうだアイン?』

「ええこのグレイズキャノンはすごいです。通常のグレイズよりもリアクターが二基装着をされているので……エネルギーゲージが倍になっていますよ。」

『ああそうだな。俺の機体も同じだ。』

克蘭クが搭乗をする機体の武器は以前戦った海賊「ブルワーズ」との戦いでグシオンが使用をしなかったグシオンアックスを装備としており腕部にはシユヴァルベ・グレイズのアンカークロウが装備されている。

射撃武装はグレイズ改と同じライフルを装備をしている。

一方でアインが搭乗をする機体は背部にキャノン砲を装備しておりロングライフルを装備をしており格闘武装はブレードを装備である。

レフタの方も荷物を纏めておりケルデイルサーガ用の武装コンテナなども運ばれて行く前に装備をチェックをしていた。

「サブマシンガンにバズーカ、ソードⅢなどが収納をされているわね？」

「レフタさんこっちのハンマーみたいなの？」

「……そうね今回持っていくわ。ケルデイルサーガに装備させておいて!!」

「了解!!」

「さて……相棒、私たちの戦いはこれからよ？」

一方でカルタ率いる部隊は鉄華団の船を確認をして戦闘態勢をとっていた。

「ふふふきたわね、まさしく……いいえそれでこそよ!!」

『カルタ。』

「カルタ指令よガエリオ……あなた参加させたのだから我々の足を引っ張らないようにそれなりの働きをなさい!!」

『ぐ……わかって……います』

「それよりあの男は……」

『あの男？あーマクギリスのことか、あいつなら休暇中ですよ。今頃その子どもと過ごしているじゃないですかー（俺はレフタさんを手に入れるためなんだってするさ……）』

「地球にいるならどうして私に連絡をしないのよ。」

『え？直属の上司じゃないあなたになんで報告をする義務が？』

「ガエリオ!!あなたも我ら地球軌道統合艦隊を馬鹿にしているの!!」

『はあ？いやそんなつもりは……』

「もういいわ、あなたきちんと働いてなかったら折檻が待っているわよ!!」

『はあ!?折檻!?なんでせっか……』

ぶつと通信を切り戦闘準備を始める。

一方でイサリビ方ではユージンがブリッジに座り準備を進めている中、レフタ達はMSに搭乗をしていつでも出れる準備を始めていた。

カルタ率いる部隊は突撃船一隻に対して停戦信号を放つが応答をしないので艦隊に砲撃を準備をする。

「撃て!!」

砲撃が放たれて爆発をする。カルタはあつけないわねと言うがエイハブウェーブが増大をしていると聞いて驚いている。

「いったいどういうこと!？」

「エイハブウェーブ反応が二つに!!」

「そんな・・・あいつら正気の沙汰か!!」

そうイサリビはほとんどダメージを受けていなかった、その理由は前面にブルワーズの一隻が盾となつてそちらが砲撃を受けていたのだ。そしてイサリビはブルワーズの船に牽引されつつ砲火の中を突き進む。

カルタたちは砲撃を続けているがイサリビは進路変更をする。

「撃沈なさい!!とにかく撃沈撃沈!!」

そして砲撃によつてブルワーズの船が大破して漂流するが、イサリビはその間にグラスヘイムワンに突撃をした。

一方でMS部隊はすでに出撃をして降下船にいた。レフタも左手にGNハンマーを装備しており右手にロングスナイパーライフルを装備をした形態で準備が進められていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『敵接近的接近!』

「敵!?!」

見るとガンダムキマリス率いる部隊が攻撃をしてきた。三日月がキマリスを攻撃をするためにレフタたちは降下船の周りで待機をしている。

「敵がくるわ!!クランクさんたちは前線をお願いします。」

『了解した!!』

「ジュリエッタちゃんはクランクさんの援護をアイン君と昭弘。シノは私と一緒に降下船を守るわよ!!」

『ああ!!』

『はい!!』

『おうよ!!』

全機が散開をしてレフタは左手に持っているハンマーを振り回し

てブースターがついた鉄球が飛びグレイズの一機に命中をして爆発をする。

「次!!」

右手に持っているライフルでグレイズのコクピットに命中させて撃破。

『ぬおおおおおおおお!!』

グレイズカスタムが振り下ろしたグシオンアックスがグレイズの装甲を切り裂いて後ろから迫るグレイズをガンダムグレイズが腰につけている刀を抜いてグレイズのコクピットに突き刺す。

『昭弘君援護をするよ!!』

『了解だアインさん!!』

アインはターゲットマーカーを起動させて背部キャノン砲を放ちグレイズ達は散開をするとそこにグレイズ改とグシオンリベイクが接近をしてアックスとハルバードで攻撃をしていくが数の多さに苦戦をしていた。

「多すぎる。トランザムを使って……」

『MS反応MS反応』

「新手!？」

レフタは新たなMSに構えようとしたが二機はグレイズ相手に攻撃をしているのでレフタは一体何が起こっていると思っていると通信が入る。

「通信?」

『はーい愛しの妹たち!!お姉ちゃん参上!!』

『ラフタ姉さん!?!』

レフタとジュリエッタは驚いている、どうしてラフタがここにいるのかと、クランクたちもタービンの二人がいるのに驚いている。

「どうしてラフタねえたちが?」

『そうですよ!!』

『名瀬にあんたらを頼まれたからよ。時間がかかったのは百鍊の装甲を偽装をしていたのよ。ふふーん私的に妹たちと一緒にいれるからいいけどねー』

『全く、遅れた分はきつちりと働くさ。』

「なら姉さんたちここはお願いをするわね？」

『ちょレフタどこに行くの!!』

「三日月を援護をするだけよ!!」

彼女はスラストターを展開をして三日月がガエリオと戦っている場所へと向かっている。一方でバルバトスはキマリス・ブースターと戦っていた。

高速で移動するキマリスに三日月は以前よりも速くなっていることにいらついていると槍を構えて突撃をするキマリスの背部ブースターが突然として爆発をする。

『なんだ!』

「あの狙撃は………」

『三日月無事かしら?』

「レフタ姉さん。」

『何レフタさんだ!!』

彼女はケルデイルサーガはバルバトスの隣にたち胸部装甲がパージをしているのを見て成功をしたのねと思いつつ彼女は隣に立ちスナイパーライフルを構える。

『レフタさんやはり俺とあなたは赤い糸で結ばれているのですね!!』

『どうしてそうなるのよおおおおおおおお!!』

彼女は接近をするキマリスに対してライフルを放つがキマリスは回避をして彼女はどうすると考える。

「ハロミサイルを展開発射させて!!」

『了解了解!』

『ミサイル発射発射!』

ケルデイルサーガからミサイルが放たれて爆発すると煙幕が発生をした。

『煙幕だ?!何エイハブウェーブ反応が後ろから!』

「………」

一瞬だけトランザムを使用して彼の後ろに回り残っているブースターに対してピストルIIを構えて発砲して爆発させる。

『ぐああああああああああああああああ!!』

『安心をして殺すつもりないから……』

レフタはそういつて後ろを振り向いて三日月達の方へと合流をするために向かう。

『……レフタさん、あなたは……なぜだ……殺せたはずなのに……なんで……』

ガエリオはこのままではいけないと思い帰投をする。レフタはグレイズリッターの姿を見つけるとスナイプモードを起動させてグレイズリッターの二機を撃破する。そのまま腰部に装備をしているGNロングブレイドⅡとGNショートブレイドⅡを構えてグレイズリッターたちを切っていく。

後ろの二機がケルデイルサーガに攻撃をしようとしたが赤い機体が現れて両手のブレイドを展開してグレイズリッターを切る。

「……………あなたあの時戦ったパイロットね？」

『ふ、よくわかった。』

「なんとなくだけどね？」

お互いに切っつけていき降下船の方へとケルデイルサーガが向かう。

『レフタ姉さん、戻ってきてくれ!!そろそろ大気圏に突入する事になるから!!』

「わかったわ。」

彼女はハンマーを振り回してグレイズリッターの頭部に命中させて彼らの剣とライフルを奪いそのまま奪った武器で攻撃をする。

『レフタさん急いでください!!』

アインの言葉にレフタは急いで向かおうとしたが一機のグレイズリッターが降下船に攻撃をしようとしていた。

『レフタ!!』

『ラフタ駄目だ!!機体はもう固定をしている!!』

『でもレフタがレフタが!!』

『姉さん戻れ!!』

レフタは無視をして一機のグレイズリッターを追撃をするために何か武器がないかと見ているとバルバトスが捨てたメイスを見つけ

た。

「でああああああああああ!!」

彼女はそれをキャッチをしてグレイズリッターに対して振り下ろして撃破する。そして剣を拾い別の場所に装着をしてメイスを回収する。

彼女はさてどうするかなと考えていると一方でラフタは泣いていた。

「レフタ・・・・・・・・レフタ・・・・・・・・」

「レフタ姉さん・・・・・・・・」

アトラやクーデリア、オルガ達はレフタが死んでしまったと思っていた。ビスケットが反応をする。

「エイハブウェーブ反応!!皆!!横を見て!!」

ビスケットの言葉を聞いて横を向くとそこには倒したグレイズリッターを使って大気圏を突入をしているケルデイルムサーガの姿があった。

「レフタ姉さん!!」

「おおおおおおおお!!」

「レフタお姉ちゃん!!」

「レフタああああああああああああああああああ!!」

ケルデイルムサーガはグレイズリッターを蹴り降下船の方へと飛んで行く。

「帰ってきたのね・・・・・・・・地球へ・・・・・・・・私が住んでいた世界とは違う・・・・・・・・地球に・・・・・・・・」

こうして鉄華団はカルタ・イシュー率いる地球軌道統合艦隊を突破をして地球へと降り立つ。

ケルデイルムサーガは着水をしてレフタが降りたつ。

「レフタああああああああああああああああああ!!」

「レフタおねえちゃあああああああああああ!!」

「うわ!!」

レフタは降りたつ瞬間走ってきた二人が抱き付いてきたのでそのまま倒れてしまい派手に水飛沫を上げた後、三人はびしょびしょに

なってしまう。

「馬鹿・・・馬鹿馬鹿馬鹿!!」

「ご、ごめんってラフタねえ・・・」

「あなたが死んだら私はどうしたらいいのよ!!」

「・・・ごめん。」

涙を流しながら言うラフタにレフタは何も言えないので無言で謝るしかなかった。そこにオルガ達も走ってきた。

「レフタ姉さん!!」

「大丈夫ですか!!」

「オルガにビスケット。」

「全く無茶をしてくれて、俺達がどれだけヒヤヒヤしたか・・・」

「うんレフタ姉さん助けてくれたのは嬉しいけど・・・僕たちはレフタ姉さんがいたからこそまで来たんだよ?だからその・・・」

「大丈夫よ私はそう簡単に死んだりしないって。それに今回は助かったのだからね?」

「まさか敵のMSを使って降りてくるとは思ってもいなかったけどな。」

「ふふ倒した敵の利用をしての 대기圈突入なんて始めてやったから成功をして良かったわ。」

皆の気遣いの言葉にレフタは笑ったが、びしょびしょになったのでくしゅんとかしゅんをしてみようが、それに続いてラフタとジュリエッタもくしゅんとかしゅんをしたのでオルガ達は苦笑いをしていった。

「とりあえずレフタ姉さんたちはシャワーを浴びてきたらどうだ?」

「そうさせてもらおうわ。」

蒔苗東護ノ介

カルタ・イシュー率いる地球軌道統合艦隊を退けて地球へ降下をした鉄華団、レフタ・フラン克蘭ドはケルデイルサーガに搭乗をして大気圏突入を倒したグレイズリッターを利用して突入をした。

彼女はコクピットから降りたつとラフタとジュリエッタが走って抱き付いてきたのでレフタは後ろに倒れて水飛沫をあげて三人はびしょびしょになってしまい三人はシャワーを浴びていた。

「あー暖かいわねー」

「てかラフタねえたちがあそこで抱き付いてこなかったら私倒れなくてびしょ濡れになることなかったよね？」

レフタはじとーとラフタを見ていたがラフタは頬を膨らませている。

「元を言えばレフタじゃん、皆に心配かけさせて……」

「う……」

「そうだよお姉ちゃん、あの時お姉ちゃんほかのみんなが着地をしてるのを見て一機のMSが接近してきたときに単独で向かっていったよね？ 私たちは機体を固定をさせていたから出ることはできなかったから……」

「ごめん……」

三人はシャワーを浴びてから降下船のコンテナを運ぶ手伝いをする。レフタはケルデイルサーガを使ってコンテナを運ぶ手伝いをし、基地の方へと運んで行く。

（あの時現れたのは蒔苗東護ノ介で間違いないわね……ってことはこの辺でビスケットが死んでしまう……. だけど原作を知っている私がいるから彼を死なせるわけにはいかないわ!!）

そう呟きながらレフタは克蘭クたちと共に荷物を運ぶのであった。朝日が昇り雪之丞と三日月はバルバトスの様子を見ていた。

「追加したスラスターはやっぱりもう駄目だな……. ほかは例の商会からもらったパーツでなんとかなるのだがな…….」

「火星でもやれたんだからいけるでしょ？」

「まあそうだが……」

「あたしすらも手伝うよ。」

アジールとエーコがバルバトスの調整を行うことになり、ほかのメンバーの機体も地上に適応をするためのチューニングを行っていた。

「克蘭クさんこちらはどうですか？」

「お前の機体はキャノン砲がついているからな、地上用にするにはパーツ交換が必要じゃないか？」

「レフタさんあのパーツは？」

「それはあつちにまわしておいて？」

現在ケルデイルムサーガの武装は接近武器主体になっている。腰部はホルスターが外されて奪い取ったグレイズリッターの剣が二刀腰に装着されており右手にはバルバトスが使用をしていたメイスが装備されている。

背部にはGNピストルⅡが装備されておりリアクター近くにはロングスナイパーライフルが装備されている。

そして夕方となり東護ノ介の部下がやってきて鉄華団に渡してくれと言われて鍋に持ってきた。すると中から鯛が飛びだしてきたと思ったら鰈だった。

「懐かしいわね……鰈ね。」

「なあそれ食べれるのか？」

「もちろんよ、これは魚といって肉と同じように食べれる食材なのよ？とまあちよつと待ちなさい今日は私が料理を務めるわよ。」

そしてレフタは鰈をつかった料理を作っていく、火で焼いていき焼き魚を作っていく。一方でオルガ達は蒔苗東護ノ介と話をしているので今はいない。

そのため彼らの料理は冷蔵庫に仕舞っておいて食べているがレフタやジュリエッタ以外の男性たちは食べようとしていない。

「……」

するとレフタは無言で包丁を持っていた、そして彼女が黒いオーラを纏っていくのを感じていた。

「あ、やばいレフタねえが怒っている。」

「けどよこれ食べるのは……」

「だ、だがレフタ姉さんが怒ったら後で何をされるのか……」

「ふふふあなたたち私の料理が食べれないって言うのかしら？」

「そ、そんなことはねえよ!!なあ!!」

シノが言ってから三日月はおそるおそる食べることにした。

「……美味しい。」

「な!？」

それから全員が食べていき美味しいなどの声が聞こえたのでレフタはふんと胸を張ると彼女の大きなものがぶるんと揺れたので一部の男の子たちはぼーっとレフタを見て赤くなっていた。

「?」

レフタ自身は首をかしげていたが気にしないことにした。それからオルガ達が戻ってきてエドモントンまで蒔苗氏を送る話となり、その数日後ギャラルホルンがすでにこちらに補足しているということを知った。

レフタはケルデイルサーガに搭乗をしてほかのみんなが準備が完了をする間様子を見ることにした。ロングスナイパーライフルを構えておりハロたちに警戒を任せている。

「始まるのねと地上での戦いが……さてケルデイルサーガの武器は現在いま持っているロングスナイパーライフルに背部のGNピストルII、腰部に奪い取ったグレイズリッターの剣が二丁。ホルスターを移動させて脚部の方にピストルが、脚部前面にサブマシンガンと装備をしていると……そしてミサイル発射管など……」

それから朝日が昇りギャラルホルンの船から砲撃が放たれる。ガンダムグレイズや漏影、グシオンリベイクが構えてミサイルを撃破していた。一方でバルバトスは太刀以外に何かないかと見てコンテナの中にレンチメイスを見つける。

『お、来たか三日月君……って一応確認してもいいかな?』

「なにアインさん。」

『そ、その武器は?』

「コンテナの中にあつたから使ってみようかと思つて。」

『あはははは……まあいいかせて行くでしょう僕たちも。』

『おうよ!!』

『三人とも俺達は敵がどこから来るかわからないからな……油断はできないが……海上でフランクランド達が攻撃をしている。俺達は警戒をするぞ。』

『おうよおっさん!!』

一方でレフタは船をロックをしており狙撃を放ったが掠ってしま
う。

「外した？修正をしてもう一発放つわ。」

レフタは修正をして今度は発進をしようとしているグレイズに
ロックをして弾が発射をしてグレイズ一機に命中をして爆発させる。

『命中命中!』

『さすがお姉さまです!!』

海上に現れたグレイズを漏影を中心に当たっていきレフタは後ろ
の方へと下がっていき上空から降ってくるMS部隊を追撃をするた
めに三日月達と合流をするために向かっていく。

「降下部隊……」

アイン達は砲撃をしてグレイズリッターたちに攻撃をするがグレ
イズリッターたちは着地をしていき並んで行く。

『は?』

『なんだ?』

グレイズリッターたちが並んで行き地面に剣を刺していく。レフ
タは合流をして何をしているんだろうと見ていると……

『我ら地球軌道統合艦隊!』

つと言っていたのでレフタはミサイルを発射させてグレイズリッ
ターに攻撃をして頭部を破壊した。

「撃つてもいいのよね?」

『当たり前だよ。』

「OKOKいくわよ!!」

ケルデイルサーガのツインアイが光ってライフルを腰部に装備を
して剣を抜いて突撃をしてグレイズリッター一機の頭部に突き刺

してそのまま倒させてる。

『か、カルタさま!!我らの陣が!!』

『おのれ!!』

レフタはそのままコクピットに剣を刺してとどめを刺す。ほかの四機もレフタに負けないと接近をしてグシオンアックスを振りグレイズリッターを真つ二つに切り裂く。

アインは後ろから援護をするために二丁ライフルを構えて掃射をする。

グレイズリッターたちは回避をしているがそこに流星号に乗るシノがアックスで切りつけて撃破する。

バルバトスもレンチメイスを振るいグレイズリッターを叩きあげてから再び叩きつけて撃破する。

海上の方ではガンダムグレイズや漏影たちが奮闘をしているが数の多さに苦戦をしていた。

「っの!!」

ジュリエッタはケルディムサーガで使用をするバズーカを放ちグレイズを攻撃をしていた。何機か抜かれてしまったがグシオンリベイクが力でグレイズを圧倒をしてサブアームでハルバートを使い切り裂く。

そして作戦は成功をしていき屋敷に向かったMW部隊も鉄華団が仕掛けた爆弾で海に落下をしていく。

ほかのメンバーたちも奮闘をしていき撃破していく。

三日月はカルタのグレイズリッターと交戦をしていた。

『私の部下をよくも!!』

「うるさいな………」

『ミカ 船を抑えた。』

『その声は………奴らの頭目か!!』

カルタはオルガの存在に気づいて三日月は追いかけてしようとしたが部下が彼を抑える。

「オルガ!!」

「ビスケット!!」

ンさせる。

「レフタさん!!」

「レフタ姉さん!!」

中では血を流しながらも気絶をしているレフタの姿を見た。

「ぶ……じ?」

「ああレフタ姉さんがかばってくれたからな……」

「そ……う……なの……ね……よか……た……」

レフタは目を閉じてしまう。

『が!!』

グレイズリッターを倒してラフタは持っている棍棒を振り下ろすために構える。

『とどめを刺してやる!!あんたをころしてやる!!』

ラフタは振り下ろそうとしたが……そこにグレイズリッター二機が漏影に突進をして漏影諸共倒れる。

『邪魔をするな!!』

『カルタさま!!今のうちに後退をしてください!!』

『す、すまない……』

カルタは後退をしていきラフタは二機のグレイズリッターをほどこうと動いていた。

『邪魔よ!!』

だが二機はカルタを逃がすために漏影を動けないようにしていたが二機が吹き飛ばされた。

ラフタは突然として動けるようになったのでそのまま棍棒でグレイズリッター一機のコクピットを殴って撃破した。

もう一機が起き上がり漏影に攻撃をしたがコクピットに命中をして後ろに倒れる。

『姉さん!!』

一体誰かと見ているとケルディムサーガの右手に持っているライフルから放たれた弾丸がグレイズリッターに命中をして撃破した光景だった。

「よく……やったわ……おる……が……」

「ああ姉さん眠っていてくれ。」

「ふふ……そう……するわ……」

レフタは目を開けていたが再び目を閉じてケルデイルサーガの両目の光が機能停止した。

オルガが動かしていたのをレフタはわずかの意識でケルデイルサーガの右手を動かしてターゲットをロックをしてトリガーを放つたのだ。

ラフタとジュリエッタは急いでケルデイルサーガの近くに行きレフタの様子を見るためにコクピットから降りたつ。

「オルガ、レフタは!!」

「……大丈夫だ気絶をしている。」

「よかったです……」

「だがしばらくは安静にする必要があるね。僕たちのせいで……」

「ああ……」

こうしてカルタ率いる部隊を撃退した鉄華団たち、だがレフタはこの戦いで負傷をしてしまう状態になった。

移動をする鉄華団。

ギャラルホルンが蒔苗東護ノ介を襲撃をしてきたが鉄華団たちはそれを突破をした、だがこの戦いでレフタはオルガとビスケットを守るためにカルタ・イシュューが搭乗をするグレイズリッターの剣をコクピット付近に受けてしまい今も意識不明の状態だ。

その様子をオルガとビスケットの二人が見ていた。現在鉄華団はテイワズの定期便がある駅へと向かっている中メンバーたちは暗かった。

「……………レフタ姉さん……………」

「タカキ……………」

「俺達も戦えたらレフタ姉さんは……………」

ライドたちはまだ起きないレフタを心配をしていた。一方で格納庫ではケルデイルムサーガの修理が行われていた。

グレイズリッターの剣が刺さった場所を中心に修理が開始をしていたが克蘭クたちは無言でいた。

「おう克蘭クさんどうした？」

「……………いやフラン克蘭ドが心配でな、あいつならすぐに起きて駆けつけると思っているのだが……………」

「まあな、特に少年組はレフタを慕っていたからな……………あんなに暗いのは久々に見たぜ……………」

一方で医療室。医療カプセルの中にレフタは眠っていた。

「……………なあビスケット。」

「何オルガ？」

「俺達のせいだな……………」

「そうだね……………レフタ姉さんに申し訳ないよ……………」

「全くだ、安心させるはずなのに……………逆に俺達が足を引っ張ってしまったな。俺は団長失格かもしれない。」

「それはないよオルガ……………」

「……………悪い、だがレフタ姉さんを見ていると辛いんだ。おつきん以外で俺たちのことを優しく見守ってくれて褒めてくれたのはレ

フタ姉さんが初めてだった。」

「そうだね今も思いだすよ。」

回想

『初めまして、私の名前はレフタ・フラン克蘭ドよろしくね?』

『オルガよくやったわね? ほらこれはご褒美だよ?』

『こーらー喧嘩はやめなさい!! 仲良くしないとけませんよ?』

『大丈夫? 全く一軍の奴らは……この子たちがしっかりしているからこの警備などは……それに比べたらあいっらは……オルガほら傷を治してあげるから見せなさい。』

『あなたたちご飯を持ってきたわよーー今日はレフタ特製スープよーー』

そういつて子どもたちはレフタが作ったスープを飲んだりしていた。

『うめーっすよレフタ姉さん!!』

『ああ美味しい!!』

『こらこらまだまだあるんだからがつつり食べないの!!』

回想終わり

「本当だね、レフタ姉さんはいつも僕たちのために動いていたよね?」

「ああ昭弘が子どもたちが毛布などがないと言ったらあの人はすぐに街の方へと行って毛布などを買ってきてくれたりしていたな……」

「うん、本当のお母さんのような感じだよ……」

ビスケットは眠っているレフタを見ていた。彼女の傷は医療カプセルのおかげで治っているがそれでもまだ起きない様子だ。

場所が変わりタービンスメンバーたちがいる部屋。

「……」

「ラフタ、イライラしながらマニキュアをしても歪むだけだよ。」

「……うるさいちよつと黙っててアジ……」

（はあ妹が倒れてからこの様子だ……まあラフタにとってレフタは大事な妹だからな……それが目の前で刺されたのを見ましたらな……）

「そういえばレフタの武器コンテナの中に確か剣みたいなのあったよ

ねエーコ?」

「うん確かレフタ曰く、バスターソードⅡって言っていた気がするよ?」

「そう……(きつさと出て来なさい……私がコロシテヤルカラ……レフタヲコロソウトシタアイツヲ)」

ラフタは目の光が消えた状態でふふふと笑っていた。やがて船は到着をして列車に乗り換えをする。

レフタが入っている医療カプセルも列車の方へと移動をしていく中、がんがんと叩く音が聞こえた。

「え?」

それに気づいたのはアストンである、彼は医療カプセルに近づくとレフタが目を開けていたのだ。

「レフタ姉さんが目を覚ました!!」

「「え!」」

「本当ですか!!」

アトラなどが医療カプセルの近くに行き開けるとレフタが起き上がる。

「……」

レフタは全裸で医療カプセルの中にいたので外が真冬なのを知らなかった。そのため彼女は服を着ていないことに気づいていなかった。

オルガが近づいているが顔をこちらに向けていない。

「れ、レフタ姉さん。目が覚めてよかったよ。」

「こらオルガ、人と話すときはきちんと言なさいと教えたでしょ?」

「あ、ああ悪い……けどよ見れないぜ……」

「ぬおおおおおおおレフタ姉さんの胸ポインポイン!!」

「?」

レフタはなんでシノや一部の男子が興奮をしているのかと自身の体を見て……それから顔を真っ赤にしていく。

「きやああああああああああああああ!!」

「こらああああああああ!!レフタの裸を見たやつは出てこんかゴ

「うああああああああああああああああああ!!」

そこに姉のラフタが登場をして主にシノがやられたのであった。

「つてなんで俺なんだあああああああああああがは!!」

レフタはアジーたちが用意してくれた服に着替えて医療カプセルの中から出る。

「う、ううーん大復活!!さて皆ありがとうございます?」

「そのレフタ姉さん……改めて言わせてくれ。」

「何オルガとビスケット。」

「すみませんでした!!」

「……」

「俺たちのせいでレフタ姉さんが重傷を負わせてしまった。だから……」

「本当にごめんなさい!!」

「……オルガ、ビスケット……顔をあげなさい。」

二人はレフタの言う通りに顔をあげる、彼女は怒っていないかった。

「あのねオルガとビスケット、あれはあなたたちのせいじゃないわ……私が自ら選んだことなの……二人が気にすることはないのよ。」

「けど!!」それに、大事な弟たちがやられそうになっているのを姉貴分としては見捨てられないのよ。」レフタ姉さん。」

「だからあなたたちが無事だったことがわかっただけでも本当に良かったわ。」

「レフタ姉さん……」

「それに聞こえていたのよ?オルガにビスケット、三日月、昭弘、シノ、ライドにタカキにアストン達が私に声をかけてくれたことなども含めてね?それに姉さんにジュリエッタ……二人の声もきちんと届いていたわ。」

レフタは復活をして土気の上だった鉄華団はエドモントンへとテイワズの貨物列車に搭乗をして移動をする。

レフタ自身はパイロットとして復帰をしようとしたがおつとととと体のバランスを崩してしまう。

「大丈夫レフタ姉さん？」

「ありがとう三日月、ちよつと医療カプセルの中にすぎたみたい
(笑)」

三日月もレフタが起きてくれたので笑顔になっていた。そして貨物列車はエドモントンへと向かって出発をしていた。

バルバトスとケルデймサーガが立って見張りをしているがケルデймサーガの方にはハロが自動操縦で探査をしている。

「異常ないみたい……」

『三日月君、そろそろ交代の時間だよ？』

「待ってアインさん、敵だ。」

『エイハブウェーブ反応!』

前方に三機のグレイズリッターが立っていた。その背中には赤いマントを装着をしていた。

バルバトスとケルデймサーガの二機はいつでも出撃ができる体制になっていた。

「ふふふ来た来た。」

ケルデймサーガに搭乗をする人物は相手が島で攻撃をしてきた人物が来たこと笑っていた。目に光がない状態で。

するとカルタ・イシユウが姿を現したのを見て三日月は驚いている。

「何をやる気なんだ？」

『克蘭クさんあれって!!』

『ああまさか……』

『私はギャラルホルン地球本部所属、地球軌道統合艦隊司令官カルタ・イシユウ!!鉄華団に対してMS3機同士による決闘を申し込みに来た!!』

「やはりか……あれは以前私がした決闘宣戦だ。まさかイシユウ家当主がするとは思ってもしなかったが……」

「おもしれーじゃねーか!!受けてやろうじゃないかなあ昭弘!!」

「ああ!!」

「熱くなっているじゃないよ!!決闘なんてばかばかしい。」

「そうだな．．．．．以前私も同じことをしたが今回ばかりはアジークんに賛成だ。」

三日月は相手を叩き潰す為に動こうとした時向こうの車両に立っていたケルデイルムサーガが出撃をしていく。

「あれ？確かハロが動かしていたよね．．．．．レフタ姉さんは確かまだ乗せれないからジュリエッタが見ているはずだよね？」

カルタは言葉を言い終えたので自身のMSに乗りこもうとした時、ケルデイルムサーガが飛びだしてきた。

「な!!」

「貴様!!カルタさまの言葉を最後まで聞い!!」

だがそれを言う前にケルデイルムサーガは持っているバスターソードIIをパイロットごと突き刺して押し倒した。

「な!!」

「レフタ姉さん!」

その行動にオルガ達は驚いている。レフタが生身の人を突き刺している姿を．．．．．だがすぐにオルガの後ろを現れた人物に驚いてしまう。

「何があったの?」

「え!?!レフタさん!?!」

「な!!じゃあ誰が．．．．．」

「なんでケルデイルム動いているの?」

グレイズリッター機を倒したケルデイルムサーガはバスターソードIIを抜いて構える。

「カルタさまここは一度撤退をぐあ!!」

カルタに進言をしようとした部下は突然としてバランスを崩して倒れる。ケルデイルムサーガの左手にGNピストルが装備されておりそれを発砲をしてグレイズリッターの右足を撃ち抜いて爆発させる。そのまま接近をしてバスターソードIIでコクピットを突き刺した。

『え、えぐい．．．．．』

「．．．．．フランクランド?」

『おい誰がケルデイルムサーガに搭乗をしている!!』

「オルガどういうことだ!!」

『今こっちにレフタ姉さんがいるんだ!!』

「……………ラフタはどうした!!」

全員がラフタがいなことに気づいた。漏影に搭乗をしていないとなると戦っているのはまさかとアジューはモニターの方を見る。

「なんてこと私の親衛隊をよくも!!」

「……………ふふふ。」

ケルデイルサーガに搭乗をしていたのはラフタだった、彼女はコクピットから抜いてバスターソードⅡをカルタの乗っているグレイズリッターに突き付けていた。

スラストアーを全開にしてグレイズリッターに近づく、カルタは剣で応戦をするが回避をしてバスターソードⅡを横にして吹き飛ばす。

「うぐうう!!私に戦いたかった!!正々堂々と戦いたかった!!」

グレイズリッターの剣をかわして彼女は腰につけているグレイズリッターから奪った剣を抜いて左手を切断させる。

「そうでなくては私らしくない!!」

後ろの方へと飛ぶがケルデイルサーガは逃がさないと脚部のサブマシンガンを抜いて発砲をする。

カルタは回避をするが肩などに当たりパーツが吹き飛ばす。

「私はカルタ・イシユード!!」

「……………ふんそれがどうしたって言うのよ!!」

接近をして頭部を殴りグレイズリッターを殴り飛ばす。

「ぐううううううう!!」

そのまま接近をしてバスターソードⅡを振り下ろして右手を切断させて吹き飛ばす。そのまま上空へとび逃げようとした。

「逃がすと思ってるの?」

ケルデイルサーガも上昇をしてバスターソードⅡで叩きつけてグレイズリッターは地面に叩きつけられる。そのまま着地をして彼女はバスターソードⅡを地面に刺して脚部のGNピストルを抜いて両足に発砲をしてグレイズリッターは四肢を失ってしまう。

「こんなの違う……………私は恐れない!!」

「……………あんただけは私が殺す……………もう止められない。あんただけはこの手で妹の……………レフタを傷つけたあんただけは私のこの手で殺す!!」

コクピットに突き付けて発砲をしようとしたが光弾が放たれてケルデイルムサーガは両肩部のフルシールドでガードをする。

「く!!新たなエイハブウェーブ反応!」

ラフタは回避をして新たな機体が現れてカルタが搭乗をするグレイズリッターを回収をした。ラフタは新手のMSに対して発砲をしようとしたが相手の機体ガンダムキマリストルーパーは地面の雪を放ち煙幕變わりに撤退をする。

「くそ!!」

『……………クソクソ』

一方でキマリストルーパーに搭乗をするガエリオはカルタが乗るグレイズリッターを連れて基地へと戻っていく。

(カルタは重傷を負ったがなんとか回収できた……………レフタさんがあんなにするはずがない……………ならあれに搭乗をしているのは別の奴ってことか……………)

「お……………の……………れ……………が……………ん……………だ……………む……………て……………つ……………か……………だ……………ん……………は……………わ……………た……………し……………が……………た……………お……………す……………!!」

「……………カルタ……………」

一方で列車の方ではケルデイルムサーガが帰投をした。レフタはパイロットが降りてくるのを待っていた。ハッチが開いてラフタが降りてきた。

「やっぱりラフタねえが乗っていたんだね?」

「……………そうよ。あいつだけは私がやらないといけなかった。……………」

「あいつはレフタを刺した奴で間違いなかった。だから私はエーゴに頼んでバスターソードⅡを出してもらった。ハ口たちも協力をしてくれたから。」

「ハ口……………」

レフタはハ口を見ると彼らは羽をパタパタさせていた。

『あいつあいつレフタを傷つけた傷つけた!』

『許せない許せない!』

(そうカラフタねえだけじゃなかったのね、私が傷ついたのを見たく
なかったのはあなたたちも一緒ってことなのね?)

エドモンソン攻略せよ

ラフタの活躍でカルタ・イシューが攻めてきた三機を撃退をした。そして鉄華団たちはいよいよエドモンソンに到着をした。レフタ自身も完全に復活をしてケルデイルサーガに搭乗をして今回は武器が違う。

彼女は鉄華団のMW部隊を援護をするためにロングスナイパーライフルを装備をしていた。

「オルガ、私の作戦はこのロングスナイパーライフルを使って私はMW部隊を攻撃をするわね？だからラフタ姉さんたちはお願いね？」

『任せなさい!!』

さてといいながらレフタはターゲットマーカールを出して準備をしている。オルガ達が搭乗をするMWにギャラルホルンのMWは攻撃をしてこようとしていた。

だがその前に弾丸が放たれてMWの一機が破壊される。それはレフタが搭乗をするケルデイルサーガが放った弾丸が命中をして爆発をした。

一方でMS部隊の方はバルバトスたちが持っているメイスで殴り飛ばして倒す。そこにグレイズカスタムがグレイズアックスを振り下ろして真つ二つに切り裂く。

流星号とグシオンリベイクがアックスとハルバードを振り回して攻撃をして切っていく中、漏影二機とアインが搭乗をするグレイズキャノンは援護をして迫りくるグレイズを次々に命中をして撃破していく。

「ヤーてまだまだうつわよ？」

そのままトリガーを引いて遠くから放って弾丸が命中をしてMWは爆発をしていく。さらにMW部隊はチャンスと攻めていくが部隊が固まっていく。

「オルガ一旦撤退を!!」

『ああ!!全機補給に入るぞ!!』

一旦下がってMW部隊は補給に入るため撤退を開始をする。レフ

タはそのまま逃がすために長距離狙撃をして放ち撃破する。レフタの方も弾切れになつてきたタイミングで撤退をする。

レフタも補給をするために基地へと帰投をするが今は二日目で被害は出ていない状態での撤退だ。これを何度も何度もしているのでギヤラルホルンの方は疲労を高めていた。さらにユージン達も合流をしていた。

「レフタ姉さん大丈夫かよ!!」

「ゆ、ユージンにチャド、アストンたちも心配をしないでよ大丈夫だからね?」

「全くシノから姉さんが倒れたと聞いたときは俺達ヒヤヒヤしたぜ。」

「でもありがとう、ならオルガ、私は明日は?」

「ああ姉さんはミカたちと一緒に敵を叩いてくれ!!」

「了解よ!!」

レフタはそういつてケルデイルサーガに搭乗をしてロングスナイパーライフルを構えようとしたがMS戦では不利ねと考えていつものライフルを構えてバルバトスたちがいる場所へと飛ぶ。

「さあ明日で決着をつけるぞ!!俺たちの手で!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

オルガの宣言を聞いて鉄華団たちは声を荒げる。

「いいか!!誰一人も死ぬんじゃねーぞ!!もし死んだやつが出てきたとしても俺がもう一度呼び戻してやる!!いいな!!これは俺達鉄華団にとっての大仕事だ!!全員で必ず生きて帰るぞおおおおおおおおおおおお!!」

『ハロハロ』

「つてハロ?オルガ、ハロがいるけど?」

「ああラフタ姉さんがくれたんだよなそれ、サポートとして乗せていく。」

「だね、オルガ・・・死ねないよ?」

「ああ誰一人も欠けさせない、レフタ姉さんが開けてくれた道を!!ユージンたちは援護を頼むぞ!!」

「任せやがれ!!お前らは議事堂にそのおっさんとお嬢ちゃんをつれて

いけ!!」

「わかってる!!死ぬなよ……ユージン。」

「お前もな。」

お互いに拳と拳をぶつけた。一方でMS部隊の方もケルディムサーガが合流をした。

『レフタ姉さんこっちに合流ってことは向こうは大丈夫ですか?』

「ええユージンたちも地球へ降りていたからそっちにMWが回っているからね、私のアシストもだいぶ役に立ったみたいだからこっちに戻ってきたわ。」

『さてお前たち準備はいいか?』

『はいクラインさん!!』

『行けます!!』

『ではいくぞ!!』

MS部隊は出撃をする、ギャラルホルンの方のMS部隊の方は休憩をしているものがあるが補給物資などが届いていないのだ。兵士たちは不安と疲労が高まっておりケルディムサーガが射撃をして起動をしていないグレイズを撃破していき、バルバトス達が接近をしてグレイズ達を次々に攻撃をして破壊していく。

ケルディムサーガはGNピストルを構えてグレイズを攻撃をしていく中何かが攻撃をしてきた。

「あれは……」

そこに現れたのはガンダムキマリストルーパーだ、ガエリオはケルディムサーガに対して持っている槍で突進をして吹き飛ばす。

「ぐううううう!!」

スラストーを展開させて彼女は吹き飛ばした反動を抑えた。ガエリオはケルディムサーガの方を見ながらちらつとほかのを見ている。(俺がしたことは正しいだろうか……俺は……あいつを……)

『レフタ!!』

『待てレフタ何かが来る!!』

アジーの言葉を聞いてレフタは後ろへ下がると何かが降りてきた、

その機体は黒い機体で頭部はグレイズリッターに似ているがその体格は従来のグレイズに比べて一回り大きい印象であった。

『うふふふあはははははははははははははははは!!素晴らしいわ!!なんて気持ちがいいのかしら!!』

「あの声は……まさか!!」

レフタはその声に聞き覚えがあった、それは島でオルガを狙った人物カルタ・イシユウの声だ。

『さあ宇宙ネズミどもが……お前たちを殺すために私は地獄から這い上がってきたのよ!!お前たちに殺された我が親衛隊の敵……今取って見せてあげる!!』

「まさか……あの機体は……阿頼耶識!?あんなものをギヤラルホルンが使うなんて!!」

『あははははははははははははははは!!』

『くそつたれ!!』

『行くよ!!』

アジーが搭乗をする漏影がロケットランチャーを放ちカルタが乗るグレイズリッターカルタに攻撃をするが肩部のマシガンを放ちロケットランチャーを撃破する。

『もらった!!』

流星号が後ろからアックスを振るつたが姿が消えた。

『何!?!』

『遅いのよ!!』

振り下ろされた剣が流星号の左手を切断する。

『シノ!!』

『くそつたれ!!片手をやられた!!』

『この!!』

アインがキャノンで攻撃をしている中、レフタ自身も援護をしたいけどキマリスが邪魔をして援護に行けない。

「どうしたらいいの……トランザムで一気に」

『姉さん!!こいつは俺に任せて!!』

「三日月お願い!!」

『逃がすと思うのか!!』

『お前の相手は俺だ!!』

バルバトスがキマリスをレンチメイスで攻撃をしている間に彼女は急いでグレイズリッターカルタのところへと飛ぶ。

グレイズカスタムがふるったハンマーチエーンが腕を絡ませるがそれを振り回してガンダムグレイズの方へと投げつけて吹き飛ばした。

『きやあああああああ!!』

『ぐうううううううう!!』

『あははははははははは!!弱い弱いわよ!!こんな奴らに私たちの部隊がやられたとなって腹がたつわ!!今の私は最強なのよ!!私の親衛隊の敵をとらせてもらおうわよ!!』

グレイズリッターカルタは剣をふるいグシオンリベイクは盾でガードをする。

『なんて重い一撃だ!!』

『おほほほほほほこれで終わりよ!!』

『させるかあああああああ!!』

そこにロングスナイパーライフルを放ってケルディムサーガが着地をしてラフタたちに合流をした。

『フランクランド!!』

「遅れてごめんなさい。」

『三日月君があっちに対応をしてくれているのだね?』

「ええ………」

『あーその機体は私を殺そうとしていた機体!!あー憎い憎い!!今すぐにも殺してやるわ!!』

「………」

最終決戦！グレイズリッターカルタを倒して明日を
求める！

エドモントン攻略最終作戦でレフタ達MS部隊はギャラルホルンのMS部隊を翻弄をしていた時に突然として謎の大型MSが現れた。その正体はラフタとの戦いで重傷を負ったが阿頼耶識の手術により復活をしたカルタ・イシユウだった。

レフタはガンダムキマリストルーパーと交戦をしていたがバルバトスの三日月が交代をして合流をして改めてグレイズリッターカルタを見上げる。

まるで人のような姿をした感じの機体なので武器を構える。

『あー！待っていたわよ!! 貴様によって殺された我が親衛隊たちの敵を討つために私はこの体となったのよ!!』

その言葉を受けてグレイズリッターカルタの肩部からマシンガンが発砲されて全機が回避行動をする。

『くらいやがれ!!』

『はああああああ!!』

流星号とグレイズキャノンがマシンガンを放って攻撃をするがグレイズリッターカルタはそれを読んだかのように飛んだ。

『何!?!』

『あれだけの巨体で飛べるのか!?!』

『うふふふ遅い遅い!!』

彼女は持っている剣でアジীর漏影の右手を切り裂いた。

『アジールさん!!このおとおおとおお!!』

ガンダムグレイズに搭乗をしているジュリエッタは接近をして腰部の刀を抜いてグレイズリッターカルタに攻撃をするが斬撃は空振り、逆に蹴りを受けてしまう。

『きやああああああああああああああああ!!』

『ジュリ!!』

レフタはロングスナイパーライフルで攻撃をするがグレイズリッ

ターカルタの阿頼耶識の反応が早くて攻撃が当たらない。ラフタや昭弘も攻撃をするが当たる気配がない。

『無駄だったら無駄なのよ!!まずはおの赤いのから!!』

『くそ!!』

流星号はアックスでグレイズリッターカルタが放つ剣を受け止めようとしたが彼女はさらに左手で流星号の右手を切断させてそのまま流星号を蹴り飛ばす。

『シノ君!!』

グレイズリッターカルタの攻撃で流星号は戦闘不能になり、アジの機体は右手が切断。さらにジュリエッタは先ほど受けた蹴りの衝撃で気絶をしており起き上がれない様子。

レフタたちはどう対処をしようと考えているとレンチメイスがグレイズリッターカルタに命中をしてガンダムバルバトスが蹴りを入れて着地をした。

「三日月!?!」

『大丈夫?』

「ええ、けどあなたは別の相手をしていたわよね?」

『それはチョココの人がやってくれているから大丈夫。』

「チョココの人…….あーそういうことね。」

レフタは納得をしようとしてどう対処をすればいいのか考えていた。原作を知っているレフタは三日月がバルバトスのリミッターを解除をすると体が不自由になっていくのを知っているためリミッター解除はできない。

「三日月達はあいつを翻弄してくれない?一か八かな賭けをするから。」

『一体何をやる気だ?』

「それは見てからのお楽しみに…….頼んだわよ!!」

レフタは一旦下がりが三日月達はグレイズリッターカルタに攻撃をする。彼女は剣をふるって攻撃をするとバルバトスはそれをレンチメイスで受け止めてグシオンリベイクと漏影、グレイズキャノンが射撃武器で攻撃をする。

『うおおおおおおおおおおおおおお!!』

クランクが搭乗をするグレイズカスタムが背部からグシオンアツクスを振るってきた。

『なめるなあああああああああああ!!』

すると背部からサブアームが出てきた。

『なんだと!?!』

サブアームから放たれた拳がグレイズカスタムに命中をして地面を滑っていく。

『ぐああああああああああ!!』

『クランクさん!!』

『貰ったわよ!!』

グレイズリッターカルタの肩部のマシガンがアインが搭乗をするグレイズキャノンの左足に命中をして爆発をする。

『ぐうううううううう!!』

『アインさん!!』

『左足をやられた。このままじゃ……………』

一方でオルガ達の方はギャラルホルンの包囲を突破をして蒔苗たちを目的の場所へと運んでミツシヨンをコンプリートをしていた。

『後はミカたちだな……………』

『大変だオルガ!!』

『どうしたビスケット!!』

『今三日月達謎のMSと戦って、シノとクランクさん、アインさんとジュリエッタが行動不能になっているって!!』

『なに!?!』

オルガは戦っている場所の方角を見ながら三日月達が無事であることを信じてクーデリアたちを待つ。

グレイズリッターカルタと交戦をするバルバトスたち。ケルディムサーガは準備が完了をしていた。

『……………トランザムを通常よりも解放させるからおそらく使用後はすぐに戦闘不能になるわね……………でも阿頼耶識と戦うためにはこうするしかない……………ハロ!トランザム始動!』

『トランザム！トランザム！』

トランザムが起動をしてケルデイルサーガのボディの色が黒から赤へと変わりスラストを全開にして突撃をする。

『ぐあああああああああ!!』

『昭弘!!ぐ!!』

サブアームを一つ壊されたグシオンリベイクに左手をやられた漏影。バルバトスに乗っている三日月も相手が阿頼耶識をもっているので厄介だと思っていると光弾が飛んできてグレイズリッターカルタの肩部に当たる。

『何よ!!』

グレイズリッターカルタは見ると赤くなったケルデイルサーガが接近をして持っていたライフルを捨てて脚部のサブマシンガンを持ち発砲をする。

グレイズリッターカルタはかわしたがケルデイルサーガはそれ以上のスピードでグレイズリッターカルタの背部へと回っていた。

『なめるなああああああ!!』

サブアームが展開されてケルデイルサーガを殴ろうとしたが機体に当たらずサブアームが爆発をする。

『ぐううううううううう!!』

持っていたサブマシンガンを捨てて背部のGNピストルIIを連続して発砲させてダメージを与えていく。

『何よ!!何よあんたは!!』

「私はあの子たちの姉貴分!!弟たちを守るために私は戦うだけ!!」

弾切れとなりGNピストルIIを捨ててGNピストルに持ち変えてトリガーを引き弾が発射されてグレイズリッターカルタにダメージを与えていく。レフタはさらにミサイルを発射させて肩部の装甲などが破損させる。

『おのれえええええええ!!』

怒りに燃えるグレイズリッターカルタは剣を振るったが、ケルデイルサーガは腰部のグレイズリッターの剣でそれを受け止めてやや間を離して切りつけていく。

グレイズリッターカルタの左手を切断させてさらに頭部カメラを破損させる。

『私はカルタ、カルタ・イシューなのよ!!私は野蛮なこいつらに負けるとてもいうの!?!』

振るわれた剣をガードをしてきたが剣に罅が入り彼女は剣を捨てるが武器がなくなってしまう。

『姉さんこれを!!』

三日月は自身が装備をしている太刀を投げてレフタはバルバトスの太刀をキャッチをして構える。

そのまま接近をしてグレイズリッターカルタは剣をふるう。

『くるなあああああああああああ!!』

回避をしてケルデイルサーガが放った太刀はカルタが収納されているコクピットを貫いた。ケルデイルサーガのトランザムが解除されてグレイズリッターカルタはそのまま後ろの方へと倒れる。ケルデイルサーガも太刀を刺したままなのでそのまま倒れてレフタ自身はふうと言った。

『敵沈黙敵沈黙。』

『そのようね.....』

レフタは立ち上がりつつグレイズリッターカルタに突き刺していた太刀を抜いた。

『ううう.....』

『克蘭クさん大丈夫ですか?』

ガンダムグレイズに支えながらグシオンカスタムがレフタ達のところへと歩いてきた。

『やったのだな?』

『ええ.....かなりの武器を消耗させてしまいましたかね?』

現在のケルデイルサーガの武器はバルバトスが使用する太刀以外武器がない状態だ。すると通信が来たオルガからだ。

『レフタ姉さん、皆無事か!!』

『オルガ無事だよ。レフタ姉さんが敵を倒したよ?』

『そうか、こつちも成功をしたから基地へ帰投をしてくれ!!皆でパー

「ティーだ!!」

『おーい誰でもいいから俺を助けてくれええええええええ』

全員が声をした方を見ると両手がなくなつた流星号が倒れていた。どうやら起き上がれないためグシオンリベイクとバルバトスがその場所へと向かい流星号を起こすことにした。

彼らは基地へと帰投をするために移動をする中、レフタはちよつとだけ寄り道をするわといい一機だけ離脱をする。彼女が向かった場所に倒れていたのはキマリストルーパーだった。

「……………」

レフタは降りてコクピットを開けると血だらけのガエリオを発見をして彼を救出をする。

彼女はそのままコクピットの方へと運んで基地の方へと向かつていく。ガンダムキマリストルーパーを担ぎながら彼女はこつそりと基地へと帰還をしてガエリオを自身が使っていた医療カプセルの中へと入れた。

なぜ彼を助けたのかはレフタ自身も悩んでいたが血だらけの人をほっとけない所存であつた。

「あ、レフター……」

「ふ……おおおおおおおおお!!」

ガエリオを医療カプセルの中へと入れてから彼女は歩いていると前からラフタが抱き付いてきたのでレフタ自身は彼女の背中をビシビシと叩く。

「ラフタねえ……………いきなり抱き付いてこないで。」

彼女はすりすり攻撃を受けながらも抗議をするが、ラフタ自身は知ーらなーいといいレフタはやれやれとそのまま格納庫の方へと行く。そこではオルガが団員たちに話をしていた。

「こーれで地球での仕事も終わったのね……………長かったような気がするわ……………」

レフタはそう呟きながらオルガ達が成長をしてたなと思いつつ火星へと帰る準備を行う。

ガエリオ・ボードウィン

地球での戦いを終えた鉄華団たちが地球から火星へと帰る準備を行っている中、レフタは医療室へとやってきていた。

医療カプセルの中にいるのは先の戦いで倒れていたキマリストルーパーから出して治療をしている人物、ガエリオ・ボードウィンその人である。

（おそらく原作通りならマクギリスと戦って彼はやられて私が見つけたのよね……キマリスの方は右肩や左足部分などが損傷をしていたから彼が乗っているMSに負けた感じね……幸い顔などに傷がなかったからよかったけど……あれ？なんで私良かったって思っているんだろう？）

レフタはそう思いながら彼が起きるのを見ていたが起きそうになるので部屋を出てケルデймサーガを見ていた。

武装などは再び装着されており脚部にサブマシンガン、背部にGNピストルⅡ、腰部を少しずらした位置にGNピストルを収納をしているホルスターが装備されており腰部の武器は三日月が使用をしていた太刀が装着されていた。

三日月曰く

「それ使いづらいから姉さんあげるよ。」

と言われて現在ケルデймサーガの左腰に装着されていた。なおグレイズリッターの剣は前の戦いで折れてしまったので予備などは回収されている。

右手にはいつもの装備ロングスナイパーライフルが装備をされておりケルデймサーガの武器はコンテナに戻っていた。ほかの機体を見るとグレイズキャノンは左足の部分が修復されておりグシオリベイクやバルバトスもボロボロとなっていた。

グレイズカスタム及びガンダムグレイズも同じで各地での戦いで全機がボロボロとなっていた。

「ふむ。」

「どうしたのですか？クランクさん。」

「えー姉妹なのになーぶーオーガに訴えてやる。」

そういつてラフタはオルガがいる場所へと走っていく。三人は苦笑いをしてレフタは次の場所へと向かうことにした。

それから移動をすると昭弘と昌弘兄弟にアストンにデルマの四人で筋トレをしていたり、アトラとクーデリアという三日月、流星号と泣いているシノの姿があったが本当に全員が生き残って良かったわと思いつながらレフタは医療カプセルがある部屋へと戻る。

そこには医療カプセルが開いて辺りを見ていたガエリオの姿があった。

「あら目を覚ましたのかしら？」

「レフタさんか？俺を助けてくれたのは……」

「そうね、倒れていたキマリストルーパーからあなたをここまでこっそりと運んで医療カプセルの中にどぼんと入れたのよ。」

「そうですか……ありがとうございます。」

「……何があったのかしら？あなた随分暗いわよ？」

ガエリオはあの時の戦いを思いだしていた。レフタと変わって三日月が搭乗をするガンダムバルバトスと戦っている時に突然として砲撃が放たれて三日月はチャンスと思いレフタ達の方へと向かっていった。

『一体何が起こったというのだ!!』

ガエリオは突然として攻撃をされたのでどしんと音が聞こえたのを見るとそこには赤い機体グリムゲルデが立っていた。

『貴様何者だ!!なぜ奴らの味方をする!!』

『なぜ……簡単なことだよガエリオ。』

ガエリオは相手のMSからの声を聞いて目を見開く、なんで彼がマクギリスがここにいるのかと……

『彼らには我々の追い求める理想を具現化する手伝いしてもらわないといけない。』

なぜ彼が自分の前に現れてそこから色々と彼は話をしていきカルタを利用をしていたことを話していた。

『たとえば親友でも非道を許すわけにはいかない!!』

激昂した彼はグリムゲルデに攻撃をするがマクギリスには効かず
に次々にキマリストルーパーに切りつけられて行きダメージを受け
ていく。

そして槍を投げ飛ばして盾が吹き飛ばされる。そこからガエリオ
は槍を拾ってマクギリスが搭乗をするグリムゲルデに攻撃をしてい
くが彼は冷静にいなしていき次々にキマリストルーパーは損傷をし
ていき涙ながらにマクギリスに攻撃をしていくが最後は剣が刺さつ
て彼は気絶をした。

そして次に目を覚ましたがこの医療カプセルの中だった。そして
レフタが入ってきたのを見て今に至る。

「あなたはおそらく死んだ扱いになっているわね？向こうで
は……」

「そうだろうな……」

レフタはうーんと考えていると何かを思いついたのかちよつと
待っていないさいといいい部屋を出ていつて数分後戻ってきた。その手
には仮面を持ってきていた。

「レフタさんなんだそれは？」

「あなたには協力をしてもらいたいのよ……」

「協力？」

「こそ、私の部下としてになるけど……私はおそらく何かあつ
て命を落とす可能性があるわ。あなたには私の補助及び護衛って感
じかしら？その仮面はその証かな？安心をしてこのマスクはスライ
ドさせることで口を開けることも可能だからね？でも別に無理にと
らなくてもいいわ。あなたにだって生活はあるから……」

（全く俺はこの人に叶うはずがない……それにこの人は敵だつ
た俺を助けてくれた……なら俺ができることは……）

「俺の命などあなたに救ってもらったからここにいます。なら俺はあえ
てこの仮面をかぶろう……そしてあなたを守らせてほしい……」

ガエリオは仮面を受け取る。レフタ自身は驚いている様子だった。

「驚いたわ……でもありがとうガエリオ……おつとそ
の名前は言えないわね……でも外していいときはあるわよう……」

「それは……」

「マクギリス・ファリド」

「な!!」

「……あの男だけは私は信用ができないのよね……鉄華団を利用をしているなら私は彼を撃たないといけない……」

「レフタさん……」

「ふふ驚いているわね? 私はね……この仕事をしているから何人も人を殺したりしている。あなたの親友であるカルタ・イシューを討つたのは私よ……」

「そう……ですか……ありがとうございます……あいつも眠れることに感謝をします。」

「ありがとうね……さて名前だけどヴィタールって名前にするけどいいかしら? それであなたの機体だけど……タービンスにお願いをして偽装外装をつけてもらうことにしたわ。」

「キマリスをですか?」

「そうよさすがにそのまま使うのはまずいと思っただけ? すでにエーコさんには話してるから許可を得ているわ。ついでに私はタービンスにそのまま向かうことになるのよね?」

「タービンスにですか?」

「そそ妹のジュリエッタと一緒にケルティムサーガとガンダムグレイズにバルバトスとグシオンリベイクなどと一緒にね? この戦いで色々ポロボロになったからオーバーホールをするって言うのよ。あなたには一緒に来てもらうわよ?」

「了解した。それが我が主人の命令となら聞くさ。」

ガエリオはもらった仮面をかぶりレフタと共に部屋を出る。

（これが俺が選んだ道だ。険しいかもしれない……だが俺は命を救ってもらった人と共に見てみたい……そしてマクギリス……なぜお前がああ道を選ぶのか……俺はこの仮面から見させてもらうぞ……）

そして準備が終わるころ鉄華団のメンバーは彼女の後ろにいる仮面を付けた男性は何者だと思っていた。

「ああわかってるさ、テイワズでは俺達は下っ端だからな……いずれにしてもまずは周りとの関係を考えないといけないな……」

オルガは色々大変だぜと言いながらも何を持っていけばいいだろうかと考えていた。ちなみにバルバトス及びグシオンの方は今はまだ改修をしなくても大丈夫なのでケルティムサーガ及びガンダムグレイズの方はそのままタービンスの船の方へと運ばれて行く。

そこにはこっそりとキマリストルーパーも収納されていく。出発の日、レフタはオルガたちに声をかける。

「それじゃあオルガに皆、永遠の別れじゃないんだから泣かなくてもいいじゃないの……」

「だって……」

「いい、あなたたちは私からしたらまだ子ども……鍛えるのを忘れずに勉強もすることいいわね？特にオルガやビスケット、ユージンたちはきつちりと学ぶように。」

「うー！」

「全くこれを作っておいて正解だったわね？」

レフタは後ろからよいしょっと何かを出す。

「はいこれ。」

どしーんとおかれたものを見てオルガ達は真っ青になっていく。

「姉さんこれって……」

「私が作っておいたドリルよ？もし私が帰ってきたときにやっていなかったらどうなるかわかっているわよね？」

レフタの黒い笑みをみて全員が首を勢いよく縦に振る。よろしいというレフタは雪ノ丞とメリビットにオルガ達を託してジュリエッタたちの方を向いた。

「それじゃあオルガ、レフタとジュリエッタは預かるぜ？」

「姉さんたちをお願いします。」

「任された。」

オルガと名瀬は互いに握手をしてからレフタはタービンスの面々と一緒に彼らの船に乗りこんでハンマーヘッドへと戻る。

「……………」

レフタとジュリエッタ、ヴィタールはあたりを見ていた。

「しばらくはお前らも過ごす場所だからな慣れてもらわないといけな
いがお前さんはその仮面はどうにかできないか？」

『すまない、色々とあつて仮面を外すわけにはいかないからな……』

「まあいいじゃないかい、レフタが信頼をしている相手なんだから？な
らいいじゃないかい」

「……………」

だが一人だけ不服なのがいたラフタである。彼女はヴィタールを
じーと見ている。

レフタ達歳星へ

「……………」

タービンのハンマーヘッドの中、レフタとジュリエッタそしてヴィタールたちを乗せたハンマーヘッドはティワズ本拠地でもある歳星へと向かっている中ラフタはじーつとヴィタールを見ていた。

「怪しすぎるわよあいつ!!」

「落ち着けラフタ。」

ラフタはヴィタールを怪しんでいた、突然としてレフタと共にいる人物を彼女はすごく怪しんでいた。レフタと話をしても彼はある任務と言っていたがその任務の内容を教えてくれない。

「むむむむむむむむむむむ!!」

「いずれにしてもレフタ自身が頼っている感じだからな……………私たちがどうこう言えないだろ?」

「そうだけどさ……………くうううううううううう!!」

一方でレフタは何をしているかというときマリスの外装の相談をしていた。キマリスとばれないように黒い外装を装着するように指示を出していた。

「なるほどねーそれってこんな感じ?」

「そそ。」

原作みたいな格好させることプラス武器としてバーストサーベルではなく普通のサーベルを装備させることにしてリボルバーをGNピストルIIに変えるなどのアレンジを加えていた。

ライフルの方は改良型を使用をするなどの色々と改善をされて行く。バックパックの方はサブアームを装着をするなどの改良に加えかつて彼が使用していたランスを装備をしたりする。

一方でガンダムグレイズやケルディムサーガの方も改良の案が出されていた。

「そうね……………機動性などを考えたら色々と考えないといけないけどね……………」

格納庫の方ではアミダがラフタが搭乗をしていた漏影の姿を見て

苦笑いをしていた。左手などは切断をされておりアジー機も右手がやられているなどの損傷を受けていたからだ。

「これは本格的な修理が必要じゃないか……随分ボロボロになって帰ってきたもんだよ。」

「う!!」

アミダの言葉にアジーとラフタはどきつとなっているのをレフタは苦笑いをしながら見ていた。やがてハンマーヘッドは歳星に到着をして機体はすぐにテイワズのドッグに収納されて改修作業が始まる。

「さーてその間は暇になるわねー。」

『俺はどうしたらいいのかわからない。』

「まあ気にしたら負けよ?暇だったら「レフタあああああああああ!!」ふごおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「あ、姉さん。」

『一体何があった?レフタさんが今吹き飛ばされたような気がするが……』

「あはははは……ヴィタールさんは始めてみるのでしたっけ?これはラフタ姉さんとレフタ姉さんの恒例行事みたいなものですよ。」

『恒例行事?あのタツクルみたいなのが?』

「あはははは……」

さてそのタツクルされたレフタはラフタによつてすりすり攻撃を受けていた。

「もうラフタネエ!!毎回の如くタツクルをしてこないで!!」

「えー……いいじゃないのー」

そういいながらすりすりをするラフタにレフタはあとため息をつきながらどうしようかと考えていたがラフタがすりすりをしているので移動などができないなどと思いつながら立ちあがる。

暇だったので歳星の格納庫にやってきていた。キマリスの方はヴィタールに外装を装着をされておりガンダムグレイズは外装から

再び装着を変えたりしておりジュリエッタに会せるように改良をされていた。

ケルデイルサーガの方は色が青い色へと変えておりさらに隣には戦闘機が作成されていた。まだ開発をしているのでまだ完成をしていない。

「うわー私の機体が改装をされている。」
『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ヴィタールとジュリエッタは自分たちが使用をする機体が改装をされているのを見て驚いている中レフタは自身の機体の色が黒から青い色に変えられているのを見る。

「あれ？レフタの機体青くなっているね？」

「ええ今開発をしている戦闘機に合わせて背部の改良を行っているのよ。背部のGNピストルIIはリアクター近くに装着されるように改良されているのよ。」

「へえーそうなの？」

「そう、名前はケルデイルサーガイングラムという名前に変わるのよ。ね・・・・・・・・その戦闘機がイングラムって名前だから。」

「そうなんだ・・・・・・・・」

ラフタはケルデイルサーガ近くで作成されているのを見ながらケルデイルサーガが改良をされているのを見ている。漏影の方も外装が外されて百錬に戻されていた。腕などの修理もついに行われておりレフタは乗れないわねーと思いついて見ている。

「あんだ乗ろうとしたの？」

「そうね・・・・・・・・一応チェックなどをしないとけないから完成をしたら乗りこもうかしら？それまではシミュレーションをして鍛え直すとするかな？」

『なら付き合うぞ？』

「ふふありがとうヴィタール。」

「まちなさーい!!あんだの相手はわたしがしてやるわ!!今すぐに相手をしてやる!!」

「『~』」

三人はラフタが何故ヴィタールに対してムキになっているだろうと首をかしげていた。むーつと頬を膨らませているラフタはヴィタールに勝負を挑むことにした。

「あんと私でシユミレーションで勝負よ!!」

『はあ……それはかまわないのだが……シユミレーションをする機体はどこにあるんだ?』

「それはもちろん百鍊……ってあー……修理中だった!!」

「でしようがラフタネエ、百鍊たちが治ってからでいいじゃん……」
「うううううう」

一方で名瀬はオルガと連絡をとっていた。

「なるほどそっちにも入ってくる奴らが増えてきているのか?」

『ええ、一応そうですが……実は兄貴にMSのお願いをしたくて。』

「MSをね……まあ一応考えておくさ。今考えている機体をお前ら優先で送ってやるよ。」

『ありがとうございます……それとレフタ姉さんは元気ですか?』

「ああラフタたちに囲まれながら苦笑いをしているぞ?」

『苦笑いですか?』

「恒例のタツクルだよ。」

『あああれですか……レフタ姉さんに会いたい奴らがうるさいんですよね……』

「といつてもあいつはまだ戻れないからな……なにせ自身の愛機が改修作業を受けている影響でまだそっちに戻れそうにないぞ? お前らの方はどうだ?」

『ええバルバトスとグシオンリベイクでなんとか戦っています……やはりレフタ姉さんやクランクさんたちの離脱は大きいですね……まあミカたちがなんとかしていますからそれぐらいいは……』

「だが気を付けろよ? お前らは名前なども大きくなってきているから……レフタが言っていたことをも気になる。」

『ええマクギリスには気を付けろって言葉ですね……確かにあいつは気にいりません。』

「そうだな……とりあえずMSなどが完成をしたらまた報告をする。それともレフタに連絡させようか？」

『ぜひお願いします。』

「あいよ。」

通信を切り彼は設計図を見ていた。名前が「紫電」と書かれているMSを

完成をしたケルデイルサーガイングラス。

歳星に滞在をして4週間ほどがたった。最初に完成をしたのはガンダムヴィタールだ。キマリスに外装を取りつけた作業のためそちらの方は二週間で完成をした。そこから二週間がかりガンダムグレイズの外装などが変わっていき、ケルデイルサーガの方もインングラスという戦闘機と改良が終了をした。

格納庫にはレフタ達が来ていた。

「やつと完成をしたのね?」

『そうみたいです、俺の機体の方も外装などは終わったのですが武器の調整などで時間がかかってしまったみたいだな。』

「それならいいじゃないですか、私なんて外装を一旦外して更に改良をしているのですから……時間がかかりますよ。」

ジュリエツタは新しくなったガンダムグレイズの姿を見ていた。顔のフェイスはそのままに肩部などが丸くなり腕部や脚部はケルデイルサーガの使用をしているフレームを使用、さらにバックパックを装備しておりガンダムグシオンのようなバックパックが装備されている。

腰部はガンダムグレイズで使用していた刀をそのまま装備、ロングモードは排除されているため通常のガンダムタイプになっている。ロングモードの時はガンダムフェイスが開いてグレイズのモノアイが出てきていたがそれを排除をした。

装備も左手にシールドを装備をすることで左手に何も持たないようにしている。

ケルデイルサーガの方は黒い色の部分が青くなっている以外は通常のケルデイルサーガとほとんど変わらない。背部のGNピストルIIがフルシールドの裏側にセッティングされている以外は変わらないのである。

「おうお前ら機体が完成をしたのか?」

「名瀬さんそうですね。今からチェックのために乗ろうとしていたんです。」

「ならば、あたしと戦ってくれないかい？あんと一度戦ってみたくてね？」

「はあ……」

アミダは治った百鍊を試すために前の時は戦えなかったレフタを指名をした。彼女自身はあんまり乗り気じゃなかったが指名をされたのでケルデイルサーガに乗りこむ、すでにイングラスは背部に装着をされておりハロは四体に増えていた。

それはイングラス部分の補助をするためにハロを増やしたのだ。彼女は装備をバスターソードⅡを装備をしてそれを左手で盾のようにして持ち右手にロングライフルを装備をする。

「さてつとハロ達サポートお願いね？」

『『『任せる任せる!!』』』』

ハンマーヘッドの格納庫が開いてレフタはふうと深呼吸をしてから発進カタパルトに移動をする。

がしがしつと足部がロックされて彼女は出撃準備をする。

『進路クリアー！ケルデイルサーガ発進どうぞ!!』

「レフタ・フランクランド！ケルデイルサーガイングラス出る!!」

ケルデイルサーガイングラスはハンマーヘッドから飛びだして目的の場所へと到着をする。前方にはアミダが搭乗をする百鍊が待っていた。

彼女の機体は漏影としてラフタが搭乗をしていたがグレイズリッターカルタとの戦いでボロボロにされて戻ってきたがテイワズのメカニクたちにより復活をして彼女が搭乗をしている。

『さーて来たみたいだね？本当に変わったみたいだねー』

「ええケルデイルサーガイングラスです。アミダさんこちらはいつでも可能ですよ？」

『はいはいお互いに実弾じゃなくて模擬弾だからね。ルールは簡単だよ？ペイント弾が当たった方が負けそれでいいね？』

「はい。」

『それじゃあ行くよ!!』

アミダが持っているライフルからペイント弾が放たれる。レフタ

は後ろの方へと下がり右手に持っているロングライフルを放つがアミダは素早く移動をして彼女が放つ弾丸をかわしていく。

(さすがアミダさんだ、ラフタネエたちよりも強い……)

レフタはアミダに一発の弾が当たらないのは戦歴の差だなど思いながらも彼女をびつくりさせるにはどうしたらいいのかと考える。

トランザムは卑怯なので使えないなーと思いつつミサイルをイングラスと本体部分から発射させてアミダの方へと放つ。

『おっと』

アミダはライフルを放ってミサイルを破壊をしていく。するとミサイルは煙幕を放ちアミダはレーザーなど狂わされた。

『まさかジャミングミサイルとはね……けど!!』

アミダは左手に棍棒を構えると後ろの方へと振り向いてガードをする。

「うそ……」

後ろから現れたケルデイルサーガイニンググラスのバスターソードIIをガードをした。レフタもまさか読まれるとは思ってもいなかった。ので驚くばかりである。

『隙ありだよ!!』

「しま!!」

彼女が放ったペイント弾がケルデイルサーガイニンググラスに命中をして模擬戦はアミダの勝利に終わる。ハンマーヘッドの方へと帰還をしてレフタはケルデイルサーガイニンググラスを着艦させてコクピットから出てくる。

「やはりアミダさんは強かった。」

『悔しい悔しい』

『お疲れ様だな。』

ヴィタールがジュースを持ってきたので彼女はふうといいながらパイロットスーツの胸元を開ける。

『ちよ!!』

ヴィタールは仮面を付けているがさすがの健全な男の子である。彼女の豊満な胸の谷間が見えてしまったので彼は後ろを向く。

「さあ次はあたしの番よ!! ヴィタール勝負よ!!」

ラフタは自身の愛機百里の方へと向かっていくのを見てヴィタールはやれやれといいながら彼はコクピットの方へと向かい搭乗をしようとした時に丸い物体がいた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『ハロハロ、ヴィタールヴィタール。』

『・・・・・・・・ハロでかいな?』

「そういえばあなた用によって作ったのだったわ。」

『感謝をする。』

ヴィダールは乗りこんで後ろにハロがいるが気にせず起動をさせていく。ガンダムヴィダールの両目が光り彼は発進カタパルトの方へと動かしていく。ちなみにヴィダールの背部はサブアームとツイン・リアクター以外にも擬装用のダミーが装備されている。

(元々ガンダムキマリスを使っているからな・・・・・・・・高機動な戦いはできないがその分武器の種類などを確認をしている。)

右手にはライフルが装備をされておりGNピストルが前面のフロントアーマーの裏側に装着されておりバックパックにはランサーが装備をされている。左腰にはサーベルが装備されていて両手にはワイヤークローが装着されている。

『さて行くとしようか?』

ヴィタールはがしんがしんと歩いていき発進カタパルトに乗せて発進準備をする。

『進路クリアー、ガンダムヴィダール発進どうぞ!!』

『了解した、ガンダムヴィダール・・・・・・・・出る!!』

ヴィタールがハンマーヘッドから出撃をしてラフタの百里も同時に出撃をしてお互いに戦う場所に到着をする。

『さーてあんたが一体何者なのか教えてもらおうわよ?』

『前にも言った気がするが?』

『だとしてもよ。さあ始めるわよ!!』

ラフタは百里のスラスターを起動させてヴィダールに接近をする。彼は回避をしてもっているライフルを構えて攻撃をする。

『甘い!!』

『ちい素早い。』

『前面から来るぞ!!』

『わかっている!!』

ヴイダールはライフルを放ちながら回避行動を行い百里の弾をかわして放つも百里の素早い移動に翻弄されていた。

(ちい、こちらも並のMS以上の素早さを持っているがあっちはこちら以上のスラスタ―出力をもっている……)

彼はライフルを放ちながらそう思っていると百里はロケットランチャーを構えて放ってきた。

『ちい!!』

ヴイダールはライフルで迎撃をしてあの素早さを抑えるにはどうしたらいいのか考える。辺りを見て彼は何かを思いついた。

ヴイダールが突然として方向転換をしたので彼女は彼に当てるために接近をすることにした。

『逃さないわよ!!』

『かかった!!』

ヴイダールは百里から放たれるライフルをかわしながらサブアームを使用をしてランサーを構えて弾が放たれる。ラフタはかわしていくが突然として百里が揺れだした。

『何?!』

『やったぜやったぜ!!』

『さあどうする?』

両手のワイヤークローを放ち百里に絡ませて彼は左腰のサーベルを抜いて百里に突き付けていた。

『なめるな!!』

『まだ動ける場所があったのか……』

百里のバックパックについているライフルがヴイダールのコクピットに照準されていたのでお互いににらみ合いみたいな感じになる。

『さてここまでにしておきな二人とも。』

アミダの言葉に二機とも武器などを収納をしていく、ヴィダールは両手のワイヤークローを百里から分離させて二機は帰投をする。

レフタは戦いを見ていたのではーうという状況になっていた。

(ヴィダール、いやガエリオさんの実力自身は阿頼耶識を使わずに戦っているからね、さらにハロのサポートもあるから実力的にはクランクさん達と同じいやそれ以上になっているわね……)

レフタは用意された部屋へと行きどこかに通信をしていた。

『ん？フランクランドじゃないかどうした？』

「クランクさん地球支部の方はどうですか？」

『ああチャド君たちが手伝ってくれているし、クーデリア殿たちのおかげでやりやすい感じだな？それで一体何かあったのか？』

「ちよつとだけね、テイワズから誰か派遣されたりしている？」

『ああそういうえばラディーチェ・リロトという男が派遣されてきたな。それがどうした？』

「その男に要注意をしながら見はつてくれないかしら？おそろくだけど彼は何かをしようとしているのは確実なの。」

『わかった。確かにあいつは鉄華団の奴らは気にいらぬ感じだからな。念のために調べたりしておく。』

「ありがとうクランクさん、アイン君にもよろしく伝えてね？」

『ああそちらも気を付けろよ？』

そういつてお互いに通信を切りレフタはベットの方へと眠る。

一方で名瀬はオルガと再び連絡をしていた。

『そうですかレフタ姉さんたちの機体は完成をしたのですね？』

「ああついでにお前らに渡すMSの方も格安で配備させることになったからな、それでレフタの方に関してはいつでも返せる状態だ。それと獅電が完成次第送ることにするか。」

『ぜひそうしてもらえたらうれしいです。』

「わかったよ。そうだな……ラフタやアジー、エコーも預かってもらえるか？」

『ええ!?!』

「おそろくラフタはレフタと離れるのが嫌だとか言いそうだからな、

それにレフタ一人でMS操縦を教えるのは苦勞を思うからな。クラルクさんたちがいない以上エコーたちの力も必要だろ？」

『ええなんとかしていますよ、やはりアインさん達がいないと本格的なことになつたら大変ですね……』

「とりあえずレフタ達を送ることや獅電完成次第にそちらに持つていくわ。」

『何もかもすみません兄貴。』

「気にするなよ。」

お互いに通信を切つて名瀬はふうと椅子に垂れる。

「あら疲れているのかい？」

「まあな……ノブリスの野郎が記憶喪失になつた影響であいつの組織は解散、テイワズはさらに上の方へと上がつてきている。鉄華団の奴らもレフタから学んでいるからほかのところとも仲よくやっているさ。」

「さすがあいつらの姉貴分つて感じだね？」

「ああ……」

レフタ達火星へ

ケルデイルサーガイニングラスたちが完成をしてからさらに数週間が経ち、テイワズは新しいMSを完成をさせた。名前は「獅電」と呼ばれるMSである。名瀬からMS数機が完成をしたので火星へと向かうといわれて彼女も帰れるのねと思いつながらハンマーヘッドに搭乗をする。

場所が変わり火星にある鉄華団の基地司令部に座る男オルガ・イツカはビスケットを呼んでいた。

「オルガ呼んだ？」

「ああビスケット、兄貴から連絡がきて新しいMSが完成をしたから今からこちらへ向かうそうさ。」

「そうか、つてもしかして？」

「ああ俺達の姉さんもその時に一緒に搭乗をして帰ってくるそうさ。」

「ふふ皆レフタ姉さんに会いたいもんね？」

「それは俺達もだろ？」

「だね。鉄華団のメンバーも増えてきたね？」

「ああ俺たちの名前も大きくなってしまったからな……ビスケットお前の妹さんたちも学校に通えるようになったんだろ？」

「うん、手続きなど色々大変だったけど二人が学校に通えるようになったから良かったよ。」

「俺達はまだまだ下っ端だからな……まあここまで大きくなるのに時間がかかっちゃったけどな？」

「まあね……クーデリアさんや克蘭クさんたちも地球で頑張っているからね。」

「ああ俺達も頑張らないとな。」

二人は話しをしているとユージンが入ってきた。

「おい二人ともハンマーヘッドから輸送船が降りてきたぞ!!」
「帰ってきたみたいだな？」

三人は司令室を出て外の方へと行く、すでにほかの鉄華団のメンバーたちが集まっており全員が何だあれとか言っている。

輸送船のハッチが開いていき青いガンダムが起き上がり地面に降り立つ。全員がガンダムフレームと驚いている中三日月は首をかしながら見ていた。

「あれってケルデймサーガ？なんか色が青くなっているけど……」

三日月の言葉を聞いて全員が改めて機体を見ると色が青くなっているがケルデймサーガで間違いない。背中に戦闘機を背負っているのを除けばだけど、そのほかにも四機の機体が起き上がり全員が驚いている中オルガ達も駆けつける。

「おー帰ってきたみたいだな？」

「おーいオルガもしかしなくてもあれって？」

「ああ俺達の姉さんたちが帰ってきたんだよ。」

ケルデймサーガイングラスは片膝をついてコクピットが開いてレフタの姿を見ると全員が声を上げた。

「おおおおおおおおおおお！！」

「レフタ姉さんだああああああああ！！」

「帰ってきたんだああああああああ！！」

鉄華団の少年たちはレフタの姿を見て喜んでいて。彼女はワイヤーを使って地面に降りるとオルガ達の方へと歩いていく。ジュリエッタやヴァイタルたちもMSから降りておりレフタの様子を見ていた。

レフタはオルガ達の前にとまり辺りを見る。

「姉さん……」

「久しぶりねオルガ達元気そうでよかったわ？」

「ああ姉さんも元気そうで何よりです。」

「はいあなたたちが頼んでいたMSを持ってきたわよ？獅電というMSらしいわ。」

「ええ兄貴から連絡はきいております、それとラフタさん達もわざわざありがとうございます。」

「気にしない気にしない」

「名瀬からもあんたたちを鍛えるように言われているからな、レフタ

1人では負担が大きいと思つてな、それとエーゴ達も一緒だからMSの整備なども任せてほしい。」

「はいありがとうございます。お前らああああああ今日はパーティーをするぞおおおおおおおおおおお!!」

「!!」
「!!」
「!!」

オルガの言葉に全員が声をあげる。レフタ自身はそこまでしなくてもいいのと思いつながらも火星に帰ってきたんだなと辺りを見る。

『火星……か。』

「ヴィタールさんは火星に来たことがあるのですか？」

『ああ……。(その時はこいつらと敵対をしていたからな……マクギリスと共に戦つてか……)』

ヴィタールことガエリオは仮面の奥でそう思いながら火星へ来たのだなと思うのであった。

『『『ハロハロ』』』

コクピットからハロ達が降りてきてヴィタールとガンダムグレイズカスタムからも降りたつ。オルガ達はハロが増えていくと見ていると警報が鳴りだした。

「警報？」

「くそまさかこんな時にミカ!!昭弘!!出れるか？」

「もちろん。」

「ああ!!」

「待ちなさい、ここは私に任せなさい。」

彼女は走りだしてケルデイルサーガイニンググラスに搭乗をして両目が点灯をする。ケルデイルサーガイニンググラスは立ちあがり右手に持っているロングアサルトライフルを持ち戦闘態勢を整えている間に迫ってきているMSが目視可能距離まで接近してきた。

「グレイズ? いやあれは……」

レフタはケルデイルサーガイニンググラスはギャラルホルンのグレイズではないと判断をしてロングサーチモードにして接近をしてくるグレイズをロックをしていた。

「……………」

トリガーを引きケルディムサーガイングラスのライフルから弾が放たれてグレイズのコクピットに命中をして倒れる。二機のグレイズはどこから攻撃が来たのだとライフルを放つがレフタがいる場所まで届くはずがない。

レフタはすぐにほかの二機もロックをして弾が放たれてコクピットに命中をして後ろに倒れた。

ライフルをイングラスにセットをして腰部にセットされたバルバトスで使用をしていた太刀を抜いて一気に接近をしてグレイズはライフルを放とうとしたが先にケルディムサーガイングラスが振りグレイズの右手を切り裂いた。グレイズはすぐにアックスを抜いて攻撃をしようとしたが先にイングラスに装着されているサブアームが展開されてバスターソードⅢを持ちそのままグレイズを両手を切り裂いた。

そのまま太刀をコクピットに突き刺してグレイズから光が消失をする。太刀を抜いてグレイズは前に倒れる。

「……………辺りに敵反応なしね……………でもこのグレイズ達はいったい?」

レフタは襲い掛かってきたグレイズ三機を回収をして基地へと帰還をした。彼女はケルディムサーガイングラスから降りたつとオルガの方へ行く。

「オルガあいつらは?」

「ああ最近俺達にちよつかいをかけてくる奴らだ。まあグレイズとかはどこから調達をしているのか知らないけどよ、まあミカたちが追いついたりしているさ。」

「そんなことがあったのね?てか増えていない鉄華団のメンバー?」

「ああ地球での俺達の活躍がどうやら火星で広がったみたいでな、少年兵などがここに入ってくるんだよな。」

「なるほどね。」

オルガは知らない奴らもいると思ったので全員を集めていた。

「皆、この人は俺達鉄華団の副団長ともいえる人だ。名前はレフタ・フ

ランクランドという。あのガンダムフレイムのケルディムサーガのパイロットをしている。俺たちにとつても頼れる人である。なおレフタ姉さんにはMS指導担当をしてもらうことになる。なおタービズから彼女の姉のラフタさんにアジーさん、整備の方にはエーコさんなど俺達に協力をしてくれる人たちが来てくれた。」

「二「おおおおおおおおおおおおお!!」二」

レフタはふふと笑いながらケルディムサーガイングラスの方を見ていた。

「さて帰ってきたわね? 私たちの場所へ……ここから始まるのね?」

レフタは原作とは違うけど火星に帰ってきたんだなと思いつつ鉄華団の皆を見ながら生きている人物が多いのでほっとしていた。

「さーて皆よろしくね!!」

模擬戦

火星にある鉄華団の基地、レフタ・フラン克蘭ドはこの基地に帰ってきていた。相棒であるケルデイルサーガは新たな姿ケルデイルサーガイングラスという機体に生まれ変わっており彼女は調整を行っている中獅電の一機は改装工事を行っていた。

それはシノが搭乗をするために阿頼耶識搭載機へと換装をしているところである。

「そうそうそのままのまま……はーい」

レフタの指示でコクピットブロックが換装されていき獅電の一機がシノ用に調整を行っていた。一方で外では獅電やランドマンロデイを使った模擬戦が行われる中ケルデイルサーガイングラスが動いてその模擬戦の中に入りこんだのだ。

「あれ？」

レフタはケルデイルサーガイングラスが動いてそのまま一機のランドマンロデイを倒したので苦笑いをしていた。その理由は簡単だ自身の姉が自分の機体に搭乗をしているんだなど。

「ラフタネエ……また勝手にケルデイルを動かしているし」

「あはははは……」

『ラフタさんはいつもそうなのか？』

「まあ私とラフタねえは似ているからね、ハ口達もラフタねえを一度乗せてからは何度も乗せているからね」

レフタはとりあえずラフタを止めないと思えばスピーカーを使う。

『ラフタねえ!!いい加減ケルデイルから降りて!!』

『いいじゃないの?ほらあんたたちかかってらっしやい!!』

そういつてケルデイルサーガイングラスは挑発をするように指をくいくいとさせてランドマンロデイ二機がケルデイルサーガイングラスに突進してきた。

一機のランドマンロデイは殴ってきたがケルデイルサーガイングラスはかわして足を出してこけさせるともう一機の手をつかんでそ

のまま背負い投げをしてもう一機の上に落とす。

「『わお』」

『ふふーん勝利のV!!』

ケルデイルサーガイニンググラスはVサインをしたのでレフタたちは苦笑いをして見ていた。さて現在バルバトスとグシオンは改装をするためにタービンスに運ばれたのだ。

「……………」

『レフタさん何をしているのですか?』

「ああこれ?今ラフタ姉さんが搭乗をしているケルデイルサーガイニンググラスとランドマンロディの戦闘記録を見ているのよ」

『戦闘記録?』

「そういえば姉さんはモビルスーツの戦闘記録をとっていてそこから鉄華団がどこが悪かったのか指摘をするんです」

『そうだったのか……………』

「まあ増えているのは新兵だけどMSの方は少ないからね……………あ、ごめんけどジュリエッタとヴィタル君は姉さんたちに渡しておいて」

「お姉ちゃんは?」

「私はオルガ達とすこーしだけお話をするから(笑)」

レフタはじゃあといひそのままオルガたちがいる場所へと行く、一方でオルガとビスケットの二人は社長室で色々とチェックをしていた。

「レフタ姉さんが持ってきてくれたMSの獅電が6機か……………だがそれを動かす奴を作らないといけないから……………」

「本当だね、MWなどはいいんだけど……………」

二人が考えていると扉が開いてレフタが入ってきた。

「あら二人ともいたのね?」

「レフタ姉さんじゃねーか」

「どうしたんですか?」

「二人とも忘れていないわよね?」

「え?」

「ほら私がタービンスに行く前に渡したドリル」

「……………」

二人は顔を真っ青にしていた、そうレフタに渡されたドリルを全員やっていないのだ。レフタ自身はうふふふと笑いながら放送をすることにした。

『鉄華団の古株の皆は大至急オルガがいる場所へ来るように、いいわね!!』

レフタはうふふふと笑いながら皆が来るのを待っていた、それから数分後ユージン達が入ってきたがレフタの姿を見た後にオルガ達の方を見て察した。

「さーてユージン、シノ、昭弘に三日月？私がタービンスに行く前に渡したドリルはどうしたのかしら？」

「いや……………あの……………その……………」

レフタはニコニコと笑っているがオルガ達は冷汗を止まる気配がない、そう現在レフタは黒いオーラを纏っているため彼らは苦笑いをするしかないのだ。

「……………そう私が出したドリルを全くやっていないというのね……………」

「レフタ姉さんその俺達も色々忙しくてな……………けっして忘れていたわけじゃないんだ」

「ほ、本当だぜ!!なあ!!」

全員が首を縦に振っていたのでレフタはあとため息をついていた。まあ忙しいのはわかってたしまあ仕方がないかと諦めることにした。

「まあ今回は不問にするわ。けれど次はナイカラネ？」

「……イエスマム!!」

レフタの黒い笑みを見て鉄華団の男たちは震え上がる。彼女は部屋を出てMSデッキの方へと戻ってきた。ケルデイルサーガイニングラスが元の位置に戻されており模擬戦は終わっているんだなど思い見ていると。

「レフタああああああああああああああああああ!!」

「ふござおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

勢いよく抱き付いてきたラフタにレフタは倒されるのが恒例となつており鉄華団の知っているメンバーはいつものことかと思いつているが知らないメンバーは驚いている。

「あ、あの!!あれは!!」

「あーあれはラフタ姉さんとレフタ姉さんのいつもの恒例行事ですよ」

「そうそうだから僕たちも気にしないようしているの」

「きーこーえーてーるーわーよーりーライドにタカキ!!」

「げげ!!」

レフタの声が聞こえてライドとタカキはそそくさと逃げていく。

「ラフタねえ!!離れて!!」

「いいじゃないの姉妹なんだから」

「そういう意味じゃなーい!!あの二人だけをとっちめないといけないのよおおおおおおおおおお!!」

レフタは叫ぶがラフタは離さずにすりすりをしているのでくああああああと叫ぶ。その様子を雪ノ丞たちは見ている。

「やれやれ騒がしくなったな・・・本当に」

「そうね・・・あの子たちレフタさんに会いたかったからね」

雪之丞とメリビットの二人はその様子を見ながらレフタとラフタの姉妹を見ていた。

「それにラフタさんはレフタさんと一緒にいれなかった反動でしょうね。あんなに積極的に妹にくつつこうとしているのは」

「おそらくな・・・あの恒例行事もな」

「恒例行事になってしまっているのですね(笑)」

「だろ?(笑)」

二人は笑いながらレフタとラフタの姉妹を見てなごんでいた。